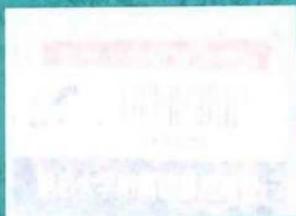


塩津山古墳群

SIOTUYAMA KOHUNGUN

一般国道9号（安来道路）建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅵ



1997年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

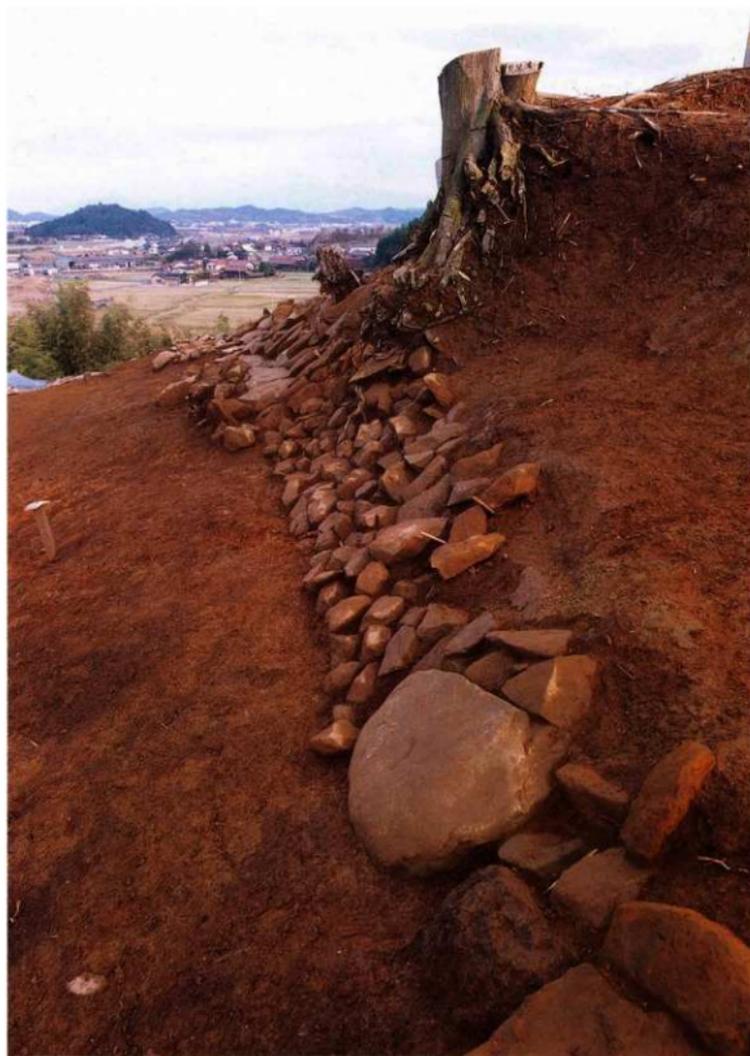
塩津山古墳群

SIOTUYAMA KOHUNGUN

一般国道9号（安来道路）建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅵ

1997年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会



塩津山1号墳北側斜面外表施設



上空から見た荒島墳墓群



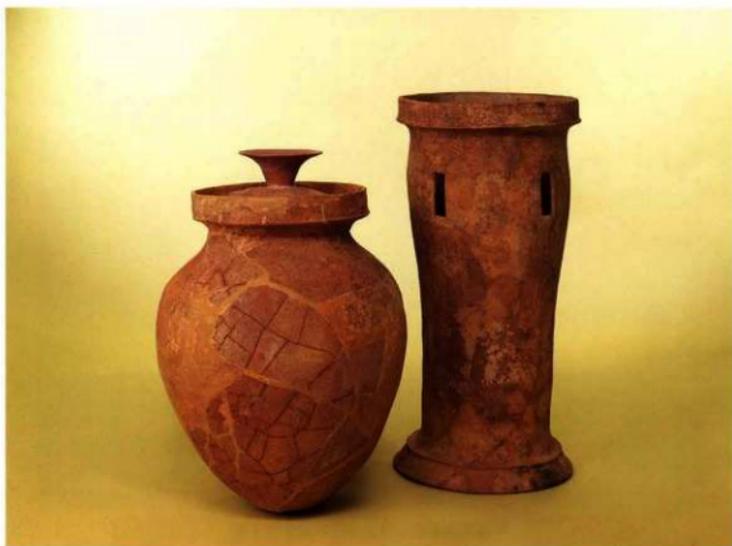
塩津山1号墳と安来平野・大山



1号墳第6主体棺使用円筒器台形土器



円筒器台形土器文様部分



1号墳第5主体壺棺と第6主体器台棺

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって、必要な調査を実施し、記録保存を行なっています。

当安来道路においても道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年から発掘調査を行なっています。

本報告書は、平成6年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成9年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 大石 龍太郎

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度から一般国道9号安来道路建設予定地内の発掘調査を実施しています。平成4年度からは、安来市荒島町～東出雲町地内（西地区）の調査を行ってきました。この報告書は平成6年度に行った塩津山古墳群の調査結果を取りまとめたものです。

安来道路の建設が進められている安来平野一帯は、古来より文化の栄えた地域であり、多くの遺跡が確認されています。今回調査を行いました塩津山古墳群では、秀峰大山を東に望む小高い山の尾根筋に、古墳時代に造られた古墳群が見つかり、当時の安来地方はもとより、列島における古墳時代幕開けや社会の様子を探るうえで貴重な資料となりました。

本報告書が安来平野周辺の歴史を解明する契機となり、広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるうえで役立てば幸いです。

終わりに、本書を刊行するにあたり、調査にご協力いただきました地域住民の方々や建設省中国地方建設局松江国道工事事務所をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

島根県教育委員会

教育長 清原茂治

例 言

- 1 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成6（1994）年度に実施した一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 2 本書で扱う遺跡は、安来市久白町字塩津および荒島町字沢に所在する塩津山古墳群である。
- 3 調査組織は次のとおりである。（敬称略、職名等は当時）

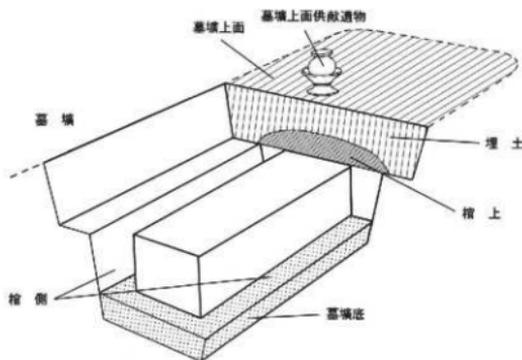
調査主体	島根県教育委員会
事務局	文化課 広沢卓嗣（課長）、野村純一（課長補佐） 埋蔵文化財調査センター 勝部 昭（センター長）、佐伯善治（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、田部利夫（嘱託）、佐藤朋子（事務補助）
調査員	宮沢明久（埋蔵文化財調査センター主幹）、北尾浩之（同（兼）文化財保護主事）、藤原尚之（同（兼）主事）、勝瀬利栄（同主事）、原田敏照（同主事）、勝部智明（同主事）、田中強志（同調査補助）、生田司子（同調査補助）、大塚充（同調査補助）
調査指導	山本 清（島根大学名誉教授）、池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、都出比呂志（大阪大学文学部教授）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、岡村道雄（文化庁記念物課主任文化財調査官）、西田健彦（文化庁記念物課文化財調査官）、三浦清（島根県文化財保護審議会委員）、朽津信明（東京国立文化財研究所研究員）
遺物整理	荒川あかね、増田弘子、笠井文恵、堀江五十鈴、山本千草、中原まり子
調査協力	高尾明浩（横田町教育委員会研修員）、森田直子（（株）ワールド航測コンサルタント研修員）

- 4 遺物の実測は調査員の他、石倉敦子（埋蔵文化財調査センター（兼）文化財保護主事）、伊藤善太郎（同（兼）主事）、梅木茂雄（同調査補助）、野津旭（同調査補助）が行った。写真撮影は、牛嶋茂氏（奈良国立文化財研究所）の指導を受け、主に大庭俊次（文化財保護主事）・勝瀬が行った。
- 5 発掘作業（発掘作業員雇用等）については、島根県教育委員会から（社）中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部 布村幹夫（現場事務所長）、木村昌義（技術員）、原 博明（技術員）、高木由香（事務員）

- 6 赤色顔料は、東京国立文化財研究所朽津信明氏に分析を依頼し、本書に分析結果を執筆いただいた。

- 7 石材については三浦清氏（島根県文化財保護審議会委員）に鑑定を依頼した。
- 8 発掘調査・報告書作成に際しては以下の方々から助言・協力をいただいた。
 三宅博士、金山尚志、水口晶郎、東森市良、木村豪章、近藤義郎、岸本道昭、佐藤晃一、酒井龍一、門脇等玄、柳本照男、久保和土、中山学、松浦有一郎、古谷毅、津金澤吉茂、山本勇、近澤豊明、下篠信行、宇垣匡雅、大谷晃二、和田晴吾、池田正吉、金山敬二、福本実、広瀬和雄、望月幹夫
- 9 挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指す。
- 10 挿図の縮尺は図中に明示した。
- 11 本書に掲載した「第1図周辺の主な遺跡」は、安米市において作成された「安米市平面図（1/2500）」を借用し作成した。「第2図塩津山丘陵の墳墓」は建設省松江工事事務所のものを浄書して使用した。
- 12 本書では古墳の埋葬施設の構造について、下の図のように呼び分けた。



埋葬施設の呼び方

- 13 本書の編集は埋蔵文化財調査センター職員の助言・協力を得て主に勝瀬が行った。「第5章 塩津山1号墳の赤色顔料」については朽津信明氏に執筆いただいた。
- 14 出土遺物および実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と歴史的環境	2
第3章 塩津山古墳群の調査	
(1) 古墳群の発見と調査の経過	4
(2) 立地	6
(3) 1号墳の調査	6
(4) 2号墳の調査	32
(5) 4号墳の調査	36
第4章 まとめ	
(1) 1号墳の外表施設・墳形	50
(2) 1・4号墳の埋葬施設について	51
(3) 円筒器台形土器について	52
(4) 赤色顔料の使用について	53
(5) 供献土器について	53
(6) 荒島墳墓群における塩津山古墳群の位置付け	53
第5章 自然化学的分析	
(1) 塩津山1号墳の赤色顔料（朽津信明）	56

挿 図 目 次

- 第1図 周辺の主な遺跡
 第2図 塩津山丘陵の墳墓
 第3図 1号墳表土層・攪乱土層中出土遺物
 第4図 塩津山古墳群調査前地形測量図
 第5図 塩津山古墳群調査後地形測量図
 第6図 塩津山1号墳調査前地形測量図
 第7図 塩津山1号墳調査後地形測量図
 第8図 1号墳南北および東西方向土層図
 第9図 1号墳外表施設平面図
 第10図 1号墳南東隅外表施設・土器検出状況および土器実測図
 第11図 1号墳北側斜面外表施設平面図および立面図(1)
 第12図 1号墳北側斜面外表施設平面図および立面図(2)
 第13図 1号墳東側斜面外表施設平面図および立面図
 第14図 1号墳第1主体実測図
 第15図 1号墳第1主体上出土土器実測図(1)
 第16図 1号墳第1主体上出土土器実測図(2)
 第17図 1号墳第2主体検出状況および上面出土遺物実測図
 第18図 1号墳第3主体上面土器出土状況
 第19図 1号墳第3主体棺側検出状況
 第20図 1号墳第3主体墓壇底礫・棺内遺物検出状況
 第21図 1号墳第3主体上出土土器・棺内出土遺物実測図
 第22図 1号墳第4主体検出状況
 第23図 1号墳第5主体検出状況および土器実測図
 第24図 1号墳第6主体検出状況および土器実測図
 第25図 塩津山2号墳調査後地形測量図
 第26図 2号墳墳輪出土状況・調査後地形測量図
 第27図 2号墳円筒輪輸出状況
 第28図 2号墳出土遺物実測図
 第29図 2号墳西側古墳想定地出土遺物実測図
 第30図 4号墳第1主体棺側施設・棺内遺物出土状況
 第31図 4号墳第1主体墓壇底礫(左図)
 墓壇底礫除去後検出排水施設検出状況(右図)
 第32図 4号墳第1主体上面・棺内出土遺物実測図
 第33図 4号墳第2主体棺側施設見通し図
 第34図 4号墳第2主体棺側および排水施設検出状況
 第35図 4号墳第2主体墓壇底礫および排水施設蓋石検出状況
 第36図 4号墳第3主体棺上配石検出状況・完掘状況
 第37図 塩津山1号墳第6主体棺使用土器赤色顔料検出状況

表 目 次

- 第1表 塩津山丘陵の墳墓
 第2表 塩津山1・4号墳の埋葬施設
 第3表 塩津山古墳群出土遺物観察表
 第4表 荒島墳墓群主体部構造一覽
 第5表 赤色顔料分析結果一覽

写真図版目次

- 巻頭カラー 塩津山1号墳北側斜面外表施設
 巻頭カラー 上空から見た荒島墳墓群
 巻頭カラー 塩津山1号墳と安来平野・大山
 巻頭カラー 1号墳第6主体棺使用円筒器台形土器
 巻頭カラー 円筒器台形土器文様部分
 巻頭カラー 1号墳第5主体室棺と第6主体器台棺
 P.L.1 塩津山古墳群調査区遠景
 塩津山古墳群調査前近景
 P.L.2 塩津山1号墳調査前近景
 塩津山4号墳調査前近景
 P.L.3 1号墳北側斜面外表施設転石除去前
 (北側から)
 1号墳北側斜面外表施設転石除去前
 (上・東半、下・西半、上空から)
 P.L.4 1号墳北側斜面外表施設転石除去後
 (北側から)
 1号墳北側斜面外表施設転石除去後
 (上・東半、下・西半、上空から)
 P.L.5 1号墳外表施設(北東隅部分、上空から)
 1号墳外表施設(東側から)
 P.L.6 1号墳外表施設(南東隅部分、上空から)
 1号墳南東隅墳部蓋形土器出土状況
 P.L.7 1号墳第1主体上面土器検出状況
 1号墳第2主体上面検出状況
 P.L.8 1号墳第3主体棺痕跡検出状況
 1号墳第3主体刀子検出状況
 P.L.9 1号墳第5主体
 1号墳第6主体検出状況
 P.L.10 1号墳第6主体
 1号墳第6主体脚部白色粘土検出状況
 P.L.11 2号墳調査前近景(南側から)
 2号墳調査後近景(南側から)
 P.L.12 2号墳円筒輪輸出①
 2号墳円筒輪輸出②
 2号墳円筒輪輸出
 P.L.13 4号墳(手前から)第1・2・3主体検出
 4号墳第1主体刀子検出状況
 P.L.14 4号墳第2主体棺痕跡検出状況
 4号墳第2主体棺外排水施設蓋石検出
 P.L.15 4号墳第2主体頭位方向
 4号墳第2主体白色粘土検出状況
 P.L.16 1号墳出土遺物(1)
 P.L.17 1号墳出土遺物(2)
 P.L.18 1号墳出土遺物(3)
 P.L.19 1号墳・4号墳出土遺物(1)
 P.L.20 1号墳・4号墳出土遺物(2)
 P.L.21 2号墳出土遺物
 P.L.22 2号墳・4号墳出土遺物

第1章 調査に至る経緯

昭和47年5月26日付けで、建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会に「国道9号バイパス」建設の基礎資料として、鳥取県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無についての照会があった。県教育委員会は地元教育委員会の協力を得て昭和47・48年に遺跡の分布調査を行なった。この調査結果を踏まえ建設省からルート案が提示され、取り扱いの協議を経て昭和50年～51年度にかけて松江市竹矢町オノ峠古墳群などの発掘調査を実施した。

昭和55・56年度には東出雲町出雲郷から松江市古志原町に至る区間7遺跡のうち2車線分を調査した。

その後高規格道路に設計変更され、松江市乃白町～東出雲町出雲郷までが「松江道路」、以東が「安来道路」と呼称されることとなった。安来道路建設予定地では、高規格道路に設計変更された後、昭和62・63年度に再度分布調査を行なった。発掘調査は安来市赤江町から島田町に至る6.9kmの区間で平成元年～4年度まで7遺跡で実施した。平成4年度からは、安来市荒島町～東出雲町出雲郷に至る延長8kmの区間を「安来道路西地区」、平成5年度からは安来市吉佐町～同島田町までを「安来道路東地区」と呼び分けてそれぞれ調査を行った。

参考文献

建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会

「御崎谷遺跡・土元遺跡」

『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅰ』1993

「中山遺跡・巻林遺跡」

『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅱ』1994

「四ツ廻Ⅱ遺跡・林廻り遺跡・受馬遺跡」

『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅲ』1995

「柳Ⅱ遺跡・小久白遺墓群・神庭谷遺跡」

『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅳ』1996

建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会

『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』12まで刊行

第2章 位置と歴史的環境

塩津山古墳群は、東西に細長い島根県の東端、安来市に位置する。市の南方には中国山地の山並みが迫り、北側は穏やかな内海である中海を介して日本海へと通じている。中央には南の山塊に発した飯梨川・伯太川が中海へ向かって北流し、この両岸には広々とした美田地帯が広がっている。出雲への東の玄関口として古くから交通の要衝として発展し、関や烽といった古代以来の交通遺跡も残されている。また、穏やかな良港に恵まれた安来市はたたら製鉄による鉄の積み出し港として栄え、現在も鉄の町としての町作りが盛んである。

歴史的にも古くから文化が栄え、これまでに数多くの遺跡が発見されている。山陰においても有数の遺跡の密集する地域であり、早くから発掘調査が行われ、考古学史上意義深い成果を残した遺跡も多い。

安来市の西側、西赤江町・久白町・荒島町・西荒島町一帯は、安来平野の西端に位置し、標高10～30m前後の低丘陵地帯が広がり、東接する東出雲町と境をなしている。この丘陵上には多くの墳墓が発見されていて、山陰でも有数の大型墳墓の集中する地域「荒島墳墓群⁽¹⁾」として知



第1図 周辺の主な遺跡 (S=1/15,000)

- | | | | | |
|-----------|--------------|-------------|-----------|----------|
| 1. 塩津山古墳群 | 2. 仲仙寺墳墓群 | 3. 宮山墳墓群 | 4. 安養寺墳墓群 | 5. 下山墳墓 |
| 6. 造山3号墳 | 7. 造山1号墳 | 8. 造山2号墳 | 9. 大成古墳 | 10. 仏山古墳 |
| 11. 塩津1号墓 | 12. 塩津山5・6号墳 | 13. 塩津神社古墳 | 14. 若塚古墳 | 15. 中山遺跡 |
| 16. 小久白遺跡 | 17. 清水山古墳群 | 18. 柳・竹ヶ崎遺跡 | | |

られている。弥生時代後期から奈良時代に至る約500年間にわたる墳墓が確認されている。現在は干拓によって中海の汀線が北上したため、中海から入り込んでいるが、地名に「塩津」「赤江」などがあり、古くは沿岸に近い位置であったと想像される。

このうち安来平野に直接面した最も東側の丘陵では、仲仙寺8・9・10号墓、宮山4号墓、安養寺1・3号墓といった弥生時代後期～末期の四隅突出型墳墓が次々と集中して築かれる。四隅突出型墳墓は、他に塩津1号墓・塩津山6号墳が丘陵を異にして立地している。

前期古墳は、直接中海に面する最も北側の丘陵上で発見されている。前期前半の方墳である造山1号墳は一边60m以上、3号墳は30m以上、大成古墳は約45mの規模を有し、堅穴式石槨を中心主体に持つ。

中・後期古墳は、一丘陵上に集中せず分散されていて、大成古墳に隣接する推定50mの前方後方墳の仏山古墳、造山古墳群のある丘陵と谷を挟んだ西側に42m×30m以上の方墳の清水山1号墳、四隅の集中する丘陵に50mを越える前方後方墳の宮山1号墳・3号墳が発見されている。後期古墳では横穴式石室はこの墳墓群では今のところ発見されていないが、石棺式石室が塩津神社古墳と、若塚古墳で見られる。また日白横穴墓群では整った横穴墓が見られる。

これに続く墳墓では、丘陵の奥まった位置にある中山遺跡で火葬骨を内蔵する石製家形骨蔵器が、小久白遺跡では須恵器の骨蔵器が発見されており、それぞれ奈良時代以降の年代が考えられており、この時代においても、身分の高い人物が墓域としていたと見られる。

このように、弥生時代後期から奈良時代に至る約500年という長期間にわたり首長クラスの墳墓が造られるという全国的に見ても稀な地域に塩津山1号墳は立地している。

墳墓を築いた首長の基盤である集落・生産遺跡については、柳・竹ヶ崎遺跡で四隅突出型墳墓を築いた弥生時代末の大規模集落が発見されており、塩津山1号墳や当地域の前期古墳を考える上で、非常に重要な遺跡と言える。その他の時期についてはわずかに柳Ⅱ遺跡で古墳時代中期の掘立柱建物を確認されているだけで、今後の説明が待たれる。

註1 出雲考古学研究会1985による

2 塩津山6号墳は、1号墳調査時に発見され、その後安来市教育委員会により測量調査が行われている。調査を担当した水口品郎氏より6号墳は塩津1号墓と同規模クラスの四隅突出型の墳墓である可能性が強い、とご教示を受けた。

参考文献

出雲考古学研究会「荒島墳墓群」『古代の出雲を考える』4 1985

出雲考古学研究会「石棺式石室の研究」『古代の出雲を考える』6 1987

本村豪章ほか『既掘前期古墳資料の総合的再検討』1992

安来市教育委員会『清水山古墳群発掘調査報告書』1994

安来市教育委員会『大成古墳第3次発掘調査報告書』1995

第3章 塩津山古墳群の調査

(1) 古墳群の発見と調査の経過

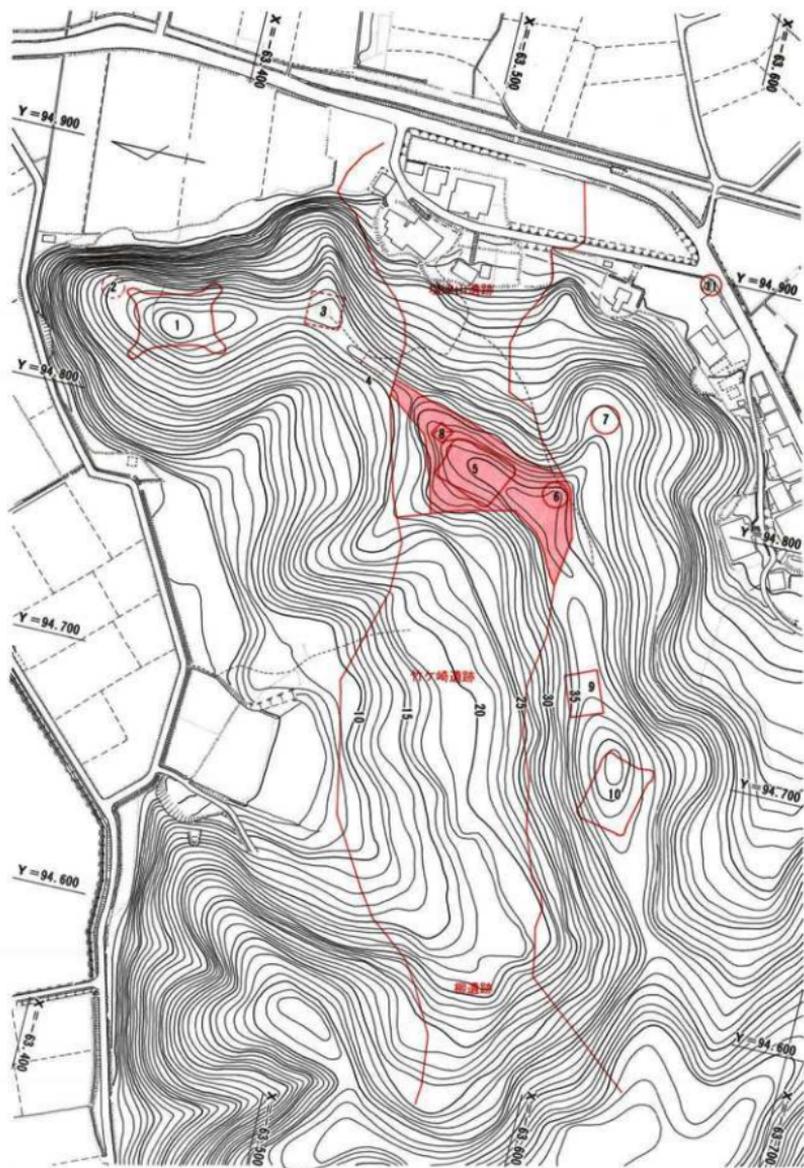
塩津山古墳群の存在は、以前から紹介されていたが、内容は明らかではなく、同丘陵の先端にある大型の四隅突出型墳丘墓の塩津1号墓や、古墳時代後期後半の石棺式石室が露出している塩津神社古墳の記述に関連してわずかに紹介されているのみであった。1988年に実施した安来道路建設に先立つ分布調査でも深い藪に阻まれて「約10mの円墳」が確認されたのみ(2号墳か)で、1991年に刊行された『安来市内遺跡分布調査報告書』でも「円墳3基」と記載されているのみである。1994年4月に、道路予定地内の立木が伐採されると、約20mの方形の墳丘が姿を表し、調査区内には少なくとも2基の墳丘(1号・2号墳)が存在し、他に墳丘の可能性をもつ高まりが2ヵ所あることが明らかとなった。

現地での発掘調査は、1994年4月に1号墳の測量調査と周辺の丘陵斜面のトレンチ調査から開始した。この結果、1号墳は20mを越える長方形を呈する高さ2m以上の墳丘であること、1号墳の立地する丘陵の東側・西側の緩斜面には弥生時代後期から古墳時代前期の大規模な集落跡が存在することが明らかとなり、まず1号墳の立地する尾根上から調査を開始することとなった。この際、今後の調査において遺跡名の混乱を避けるため、この尾根筋を境に、古墳群と東側斜面を総称し「塩津山遺跡」、西側斜面を「竹ヶ崎遺跡」「柳遺跡」と呼び分けることとした。

5月から本格的に1号墳の調査を開始し、6月には、墳丘東側・北側斜面には外表施設がかなり残っていることが明らかとなった。墳頂平坦面の調査に着手するにあたり、7月6日には第1回目の調査指導会を行ったが、時期や主体部の様相が明らかでない現状では遺跡の性格付

表1 塩津山丘陵の墳墓

第2図 番号	名称	墳形	規模 (突出部含む)	主体部	時期	備考
1	塩津 1号墓	四隅突出	40m	未調査	弥生後期か	未調査
2	2号墳	円墳	不明	未調査	不明	未調査
3	3号墳	前方後円墳又は円墳か	不明	未調査	不明	未調査
4	4号墳	円墳又は方墳か	不明	未調査	不明	未調査
5	塩津山1号墳	方墳	25m	6基	古墳前期	H. 6調査
6	2号墳	円墳	10m	不明	古墳中期	H. 6調査
7	3号墳	円墳又は方墳か	10m	未調査	不明	未調査
8	4号墳	不明	不明	3基	古墳前期	H. 6調査
9	5号墳	方墳か	10m前後	未調査	不明	未調査
10	6号墳	四隅突出	35m以上	未調査	不明	未調査
11	塩津神社古墳	封土流失	不明	石棺式石室	古墳後期	未調査



第2図 塩津山丘陵の墳墓 (S=1/2,000) (アミ部は本書報告部分)

けが困難であることより、さらに調査を進めることとなった。墳頂部の調査が進むにつれ、8月には1号墳が中心主体に竪穴式石槨を持つ前期古墳であり、中心主体の他に5基の埋葬施設があること、斜面の外表施設に四隅突出型の形態と類似する点があることが明らかになってきた。こうした成果を踏まえ9月に行なった調査指導会では「この地域の歴史を解明する上ではもちろんだが、列島における古墳時代の開始期を考える上で極めて重要な遺跡」という指導を受けた。以後、事業主体の建設省と発掘調査受託者である県教育委員会とは遺跡の取り扱いについて協議を重ねることになるが、県教育委員会は、緊急に調査体制を整えることの困難な平成7年度は、1号墳は中心主体である竪穴式石槨の内部と調査に着手していない幾つかの主体部については調査を中断することを申し出た。その後、調査は尾根上の古墳群と、住居跡を検出していた東側斜面で引き続き行い、2号墳が10mの内墳であること、4号墳が墳形不明ながら多様な埋葬施設を有する前期古墳であることなどの成果を得て、1995年1月にこの年の調査を終了した。

発掘調査と併わせて、地権者の了承・協力を得て周辺の分布調査を行ったところ、新たに古墳状の高まりが発見された。後に安来市教育委員会において測量調査が行われているが、同一丘陵上において少なくとも11基の墳墓が存在することが明らかになった(表1・図2)。現地調査中には、多くの見学者が遺跡を訪れたが、10月16日には現地説明会を行い遺跡を公開し、地元住民を中心に県内外からも多くの見学者が訪れた。

遺跡の取り扱いについては、建設省、地元安来市教育委員会や関係諸機関との協議を重ね、平成8年10月4日には塩津山1号墳の位置については道路建設工法を当初のものから、1号墳の下にトンネルを通す工法に変更することが県都市計画地方審議会により了承され、1号墳の現状保存が計られるという方向が示され、今後の保存活用にむけて協議が進められている。

(2) 立地

塩津山古墳群は、標高10～30m前後の丘陵上に位置する。現在の中海岸からは約2km南へ入り込んだ位置で、中海とは大成古墳や造山古墳群のある丘陵によって隔てられている。丘陵の先端には荒島墳墓群で最大クラスの四隅突出型墳丘墓である塩津1号墓があり尾根上には墳丘想定地を含めると11基の墳墓が並んでいる(表1・図2)。このうち安来道路範囲以南を「塩津山」以北を「塩津」と便宜上分けて称し、丘陵裾の塩津神社古墳も含めて本来一つの墳墓群を構成するものと見られる。

(3) 1号墳の調査

①調査前の状況と調査の概要

墳丘は南北方向に延びる尾根の幅いっぱいを利用して造られているため、斜面側である西側

と東側の墳丘の一部は流失していることが考えられた。また、果樹などを植え付けるために近年掘られた直径1mを越える穴が規則的に並んでおり、特に墳丘西半に多く、主体部と墳丘の一部が壊されていた。果樹穴とは別に墳丘南東隅に試掘穴状の約1m四方深さ1mの目的不明の方形の穴が掘られていた。この穴のまわりには穴を掘った際の排土が盛られ、その土の中に針金やビニール袋があることから最近掘られたものと考えられた。

墳丘の調査は、墳丘築成面を検出するために表土層と二次堆積層の除去を行なった。調査前には雑木が繁茂していたこともあり、盛土の一部は根が多く腐植土壌化しており、遺構の検出が不可能であったため腐植土は表土層として除去した。また構造を明らかにするために主軸とそれに直行する十字方向にトレンチを設定し土層の観察を行なった。これにより墳丘北側・東側斜面と南東隅には、自然石を用いた外表施設が確認された。南側・西側斜面では、地山面まで掘り下げたが外表施設は検出できなかった。

墳頂平坦面では、主体部の調査を行なった。表土層を除去した段階で、第5主体の壺棺と、各埋葬施設の掘り方の一部を検出し、供献土器が出土した。各主体の内部施設の調査については、第3・5・6主体を除いて基本的には実施していない。第1主体は石室の規模を確認するために墳丘構造確認のトレンチを拡張し、埋土の一部を掘り下げ、堅穴式石椁の天井石と石椁壁体裏込め石の一部を検出した。

②墳丘の調査

墳丘の構造・形態・規模（第6・7・8図）

調査前の測量をもとに長方形墳丘の主軸を想定し、主軸とそれに直交する2方向にトレンチを設定し、土層堆積状況の確認を行なった。墳丘築成は、地山削り出しと墳頂部盛土によるものである。南側は地山を大きくV字状に掘り割り尾根から切り離している。北側はもともと標高の低い位置であるため、南側のように大きく掘り割る必要が無く溝状の区画も認められない。墳裾には小さくテラス面が削り出されているのみで、区画溝は検出していない。斜面の表面には、基本的に盛土は行なわず、削り出された概ね25度の傾斜を持った斜面に直接石を置いたり張り付けて、外表を飾っている。

墳頂平坦面は墳丘斜面成形後、盛土されたと考えられる。墳頂は墓壇の輪郭を検出するために表土と盛土の一部を掘り下げたところ、南半は標高34mで削平された地山面が検出されるが、北半ではさらに掘り下げないと地山面が確認出来ないことから、盛土前の地山の整形は完全に水平に整えることはせず、自然地形に即して低い場所は厚い盛土で補い、最終的に標高35mのレベルで水平に整えたものと思われる。

墳丘の平面形は、墳丘斜面とテラス面との変換点の平面形が北辺は弓なりに大きく東側斜面へ反って開くいびつな長方形を呈す。他の辺は攪乱や崩落により確認しにくい、南辺ではテ

ラス面の外側はほぼ直線的に整っていて、隅の突出する溝状のテラス面とは様相が異なる。こうした平面形は、占有した場所で、地形上の制約を受けながらも墳丘東側の平野部からの景観を意識して、可能な限り墳丘を大きく誇示して見せるために採られた方策であり、基本的には方形墳を意図して造られたものと思われる。

墳丘規模は、裾部では上述のような形態上の特色があることから長軸には25～20mの幅があり、短軸は20mである。墳丘の周囲に造られたテラス面を含めると25mの規模である。墳頂平坦面の規模は約11m×17mである。

外表施設（第9～13図）

北側斜面・東側斜面・南東隅テラス部分で、石を用いた外表施設を検出した。外表を飾る他の施設は検出していない。用いられた石は、周辺の地山から産出する安山岩質の礫である。

西側と南側斜面では、後世の攪乱が大きく及んでいることもあるが、攪乱を受けていない部分でも地山に接する石はわずかで、原位置と判断できた石は無かった。転石もわずかで、配石施設があった可能性は完全には否定出来ないものの、存在したとしても北側・東側とは全く様相を異にする貧弱なもので、大部分は地山を削り出したままであった可能性が高い。

南東隅の稜線上には、四隅突出型の突出部の配石構造に類似した20～30cmの自然石を稜線に沿う方向に並べた配石構造を検出した。配石構造は墳裾を廻るように外側に列石がめぐる。稜線上には墳裾列石と同様の自然石を用い稜線方向に貼石が見られた。この配石構造の平面形態は四隅突出型墳丘墓のように大きく舌状やしゃもじ状に突出するのではなく、稜線上の石の最も外側は、東側斜面の墳丘端とはほぼ一致している。

東側斜面は安来平野側から見た場合、直接見える斜面であり、築造時には斜面全体を貼石で覆っていたと思われる、多数の転石が認められた。原位置を止めた石は非常に少なく、斜面の南半は転石が2次的に堆積したものがほとんどであった。北半では斜面貼石と墳裾テラス面への敷石が認められた。敷石の外側に列石は見られなかった。斜面の中央よりやや北側の墳裾に1m以上の巨大な扁平石があり、この周辺には拳大以下の河原円礫が散乱していた。これは他の貼石に用いられた石に比べて大きく形も整っており、墳頂部の第1主体開口部の延長上に当たることからも、第1主体の排水施設の末端の蓋石の可能性も考えられる。

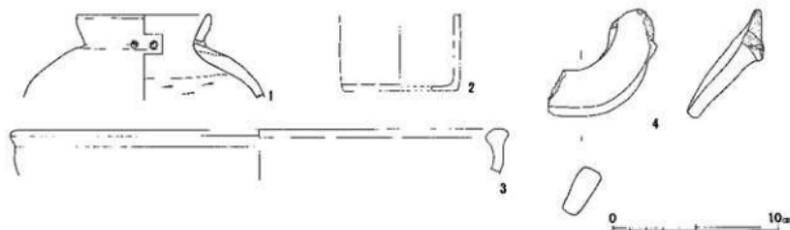
北側斜面は東側に向かって大きく開き、弓なりに反る。斜面には貼石が良好な状態で残っていた。表土と二次堆積土を除去すると墳裾のテラス面には多数の転石が堆積しており、これを除去すると斜面貼石が現れた。大きく反った東半ではテラス面に敷石とその外側に列石が認められた。斜面の貼石は中央を境に東半と西半で用いる石の選択が大きく異なり、様相が大きく異なる。東半では0.5～1mと大型の扁平石を用いて貼石を施している。西半では人頭程度の角礫を用いている。断ち割り調査を行っていないため断面構造については不明であるが、

西半の角礫を用いた貼石は、墳丘斜面とテラス面の傾斜変換点を起点に角礫を積み上げていくという方法で構築されたものと思われる。角礫を用いた西半ではテラス面での敷石や列石はもととも無い構造であったようで転石を除去するとテラス状に削平された地山面が現れ配石構造は認められなかった。東半では大型扁平石を用いた貼石の裾に、同様な扁平石を用いた敷石があり、この外側に列石が廻る。これは四隅突出型の立石列を痕跡的に止めているものと考えられる。貼石については荒島墳墓群の他の四隅突出型墳丘墓と比較してもよく似ているが、墳裾の敷石・立石といった列石構造はかなり粗雑で場所も視覚的に重要な面の隅に近い部分のみに限定されることから、四隅突出型を痕跡的に残す、四隅の退化形態の一種であると言える。

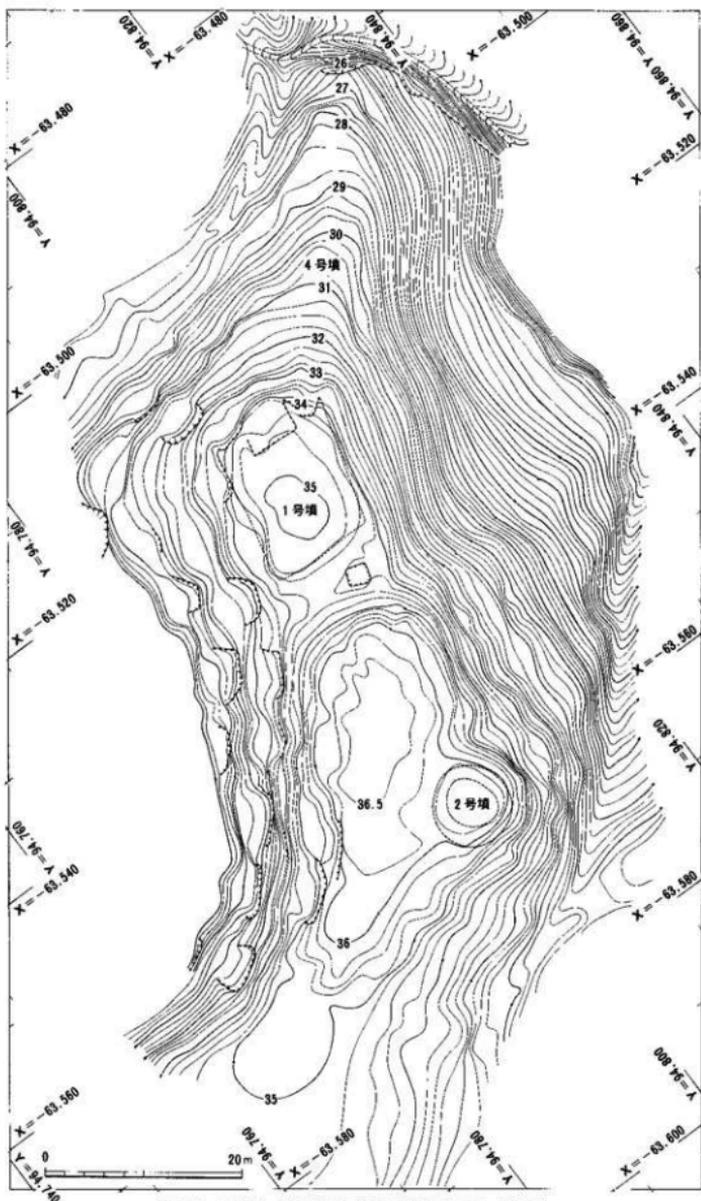
墳丘斜面・墳裾出土の遺物 (第3図・10図)

墳丘斜面配石構造の検出中に遺物が出土している。ほとんどが墳頂部の供献土器が転落したもので、摩滅した土師器細片であった。他に後世墳丘を開鑿した時に混入したとみられる近世後期以降の陶磁器片が認められた(第3図2・3)。第3図1は、西側の竹ヶ崎遺跡からの混入とみられる。4は墳丘南東隅の不明穴の排土から出土した鉢や壺に取りつく把手であり、断面は扁平な方形を呈す。

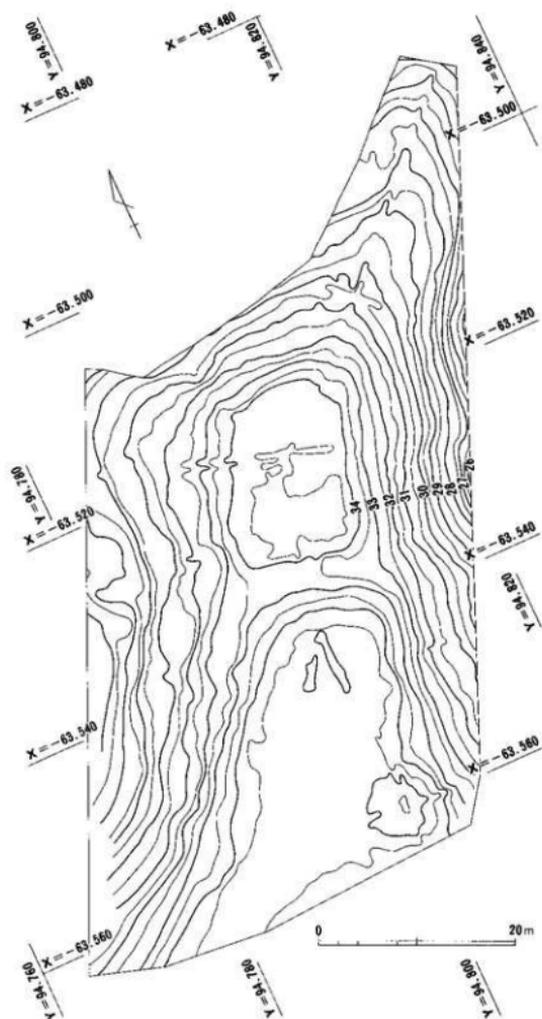
墳丘南東隅では配石構造の脇で、一個体の壺形土器が口縁部を東側に向けて寝かせた状態で出土した(第10図)。この土器に伴う掘り方は見られなかった。墳裾のテラス面からはやや浮いた状態であるが一個体が土圧で潰れた状態で、墳丘に伴うものと考えられる。同様な例には、弥生時代末期の四隅突出型墳丘墓である松江市間内越1号墓で装飾性の強い大型壺などがある。塩津山1号墳出土の土器は、当地方の前期古墳でよく見られる頸部に羽状文のあるもので、口縁部が大きく外傾する。土圧で小さく壊れ器壁も風化が著しく全体を復元できなかったが検出時の図面から器高が約30cmで、丸い胴部に正立不可ながら小さく底部の痕跡を残す面が認められる。



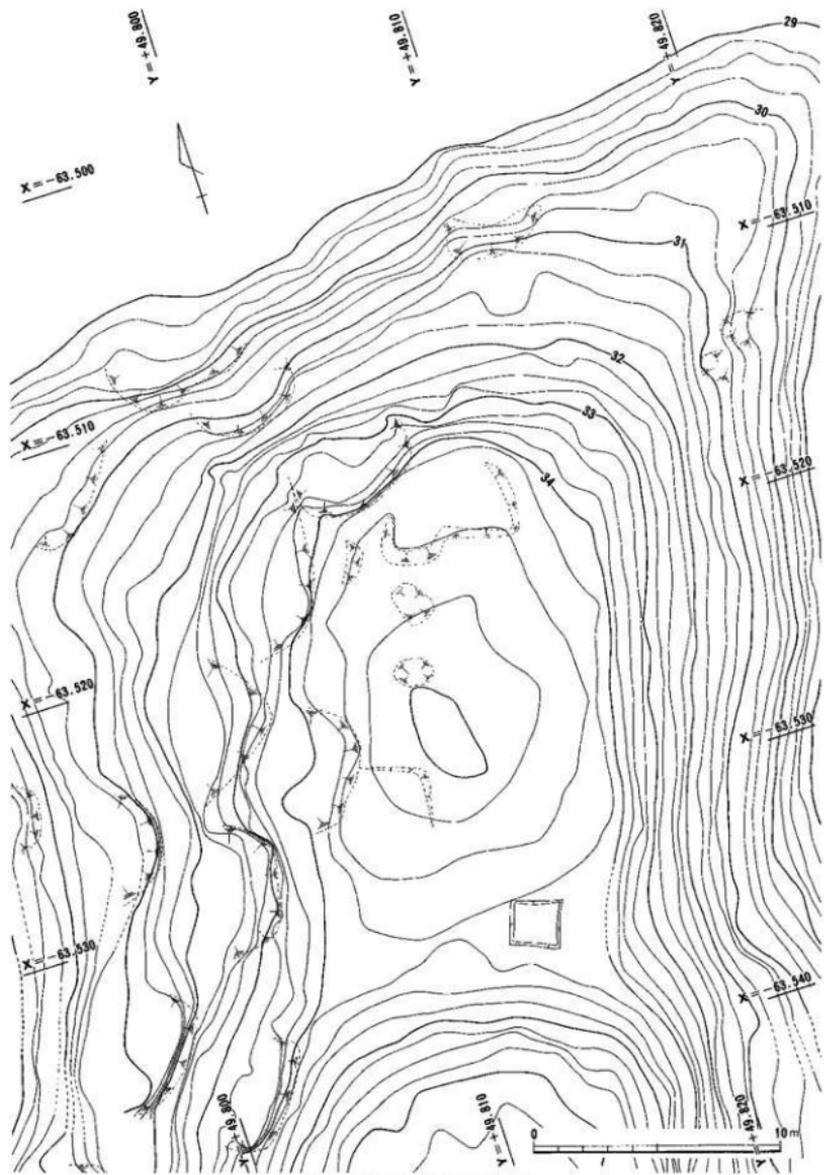
第3図 1号墳表土層・攪乱土層中出土遺物



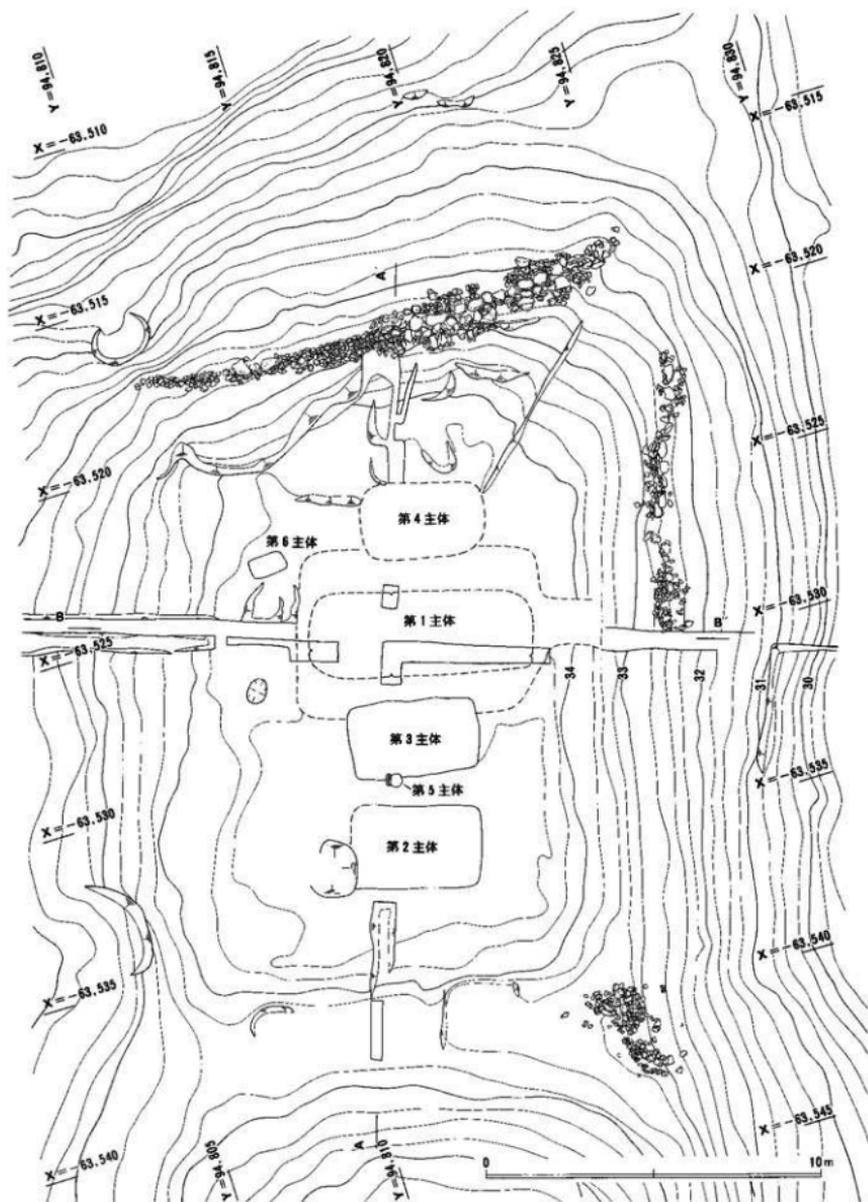
第4图 塩津山古墳群調査前地形測量図 (S=1/500)



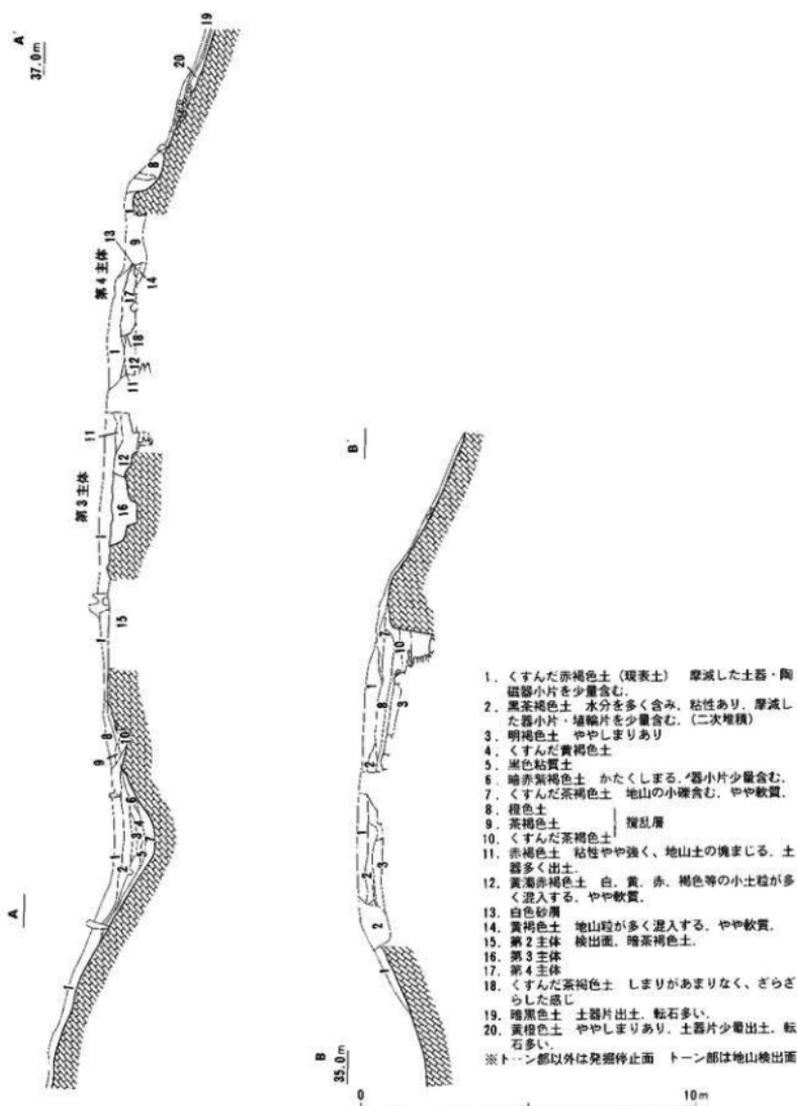
第5圖 塩津山古墳群調査後地形測量圖 (S=1/500)



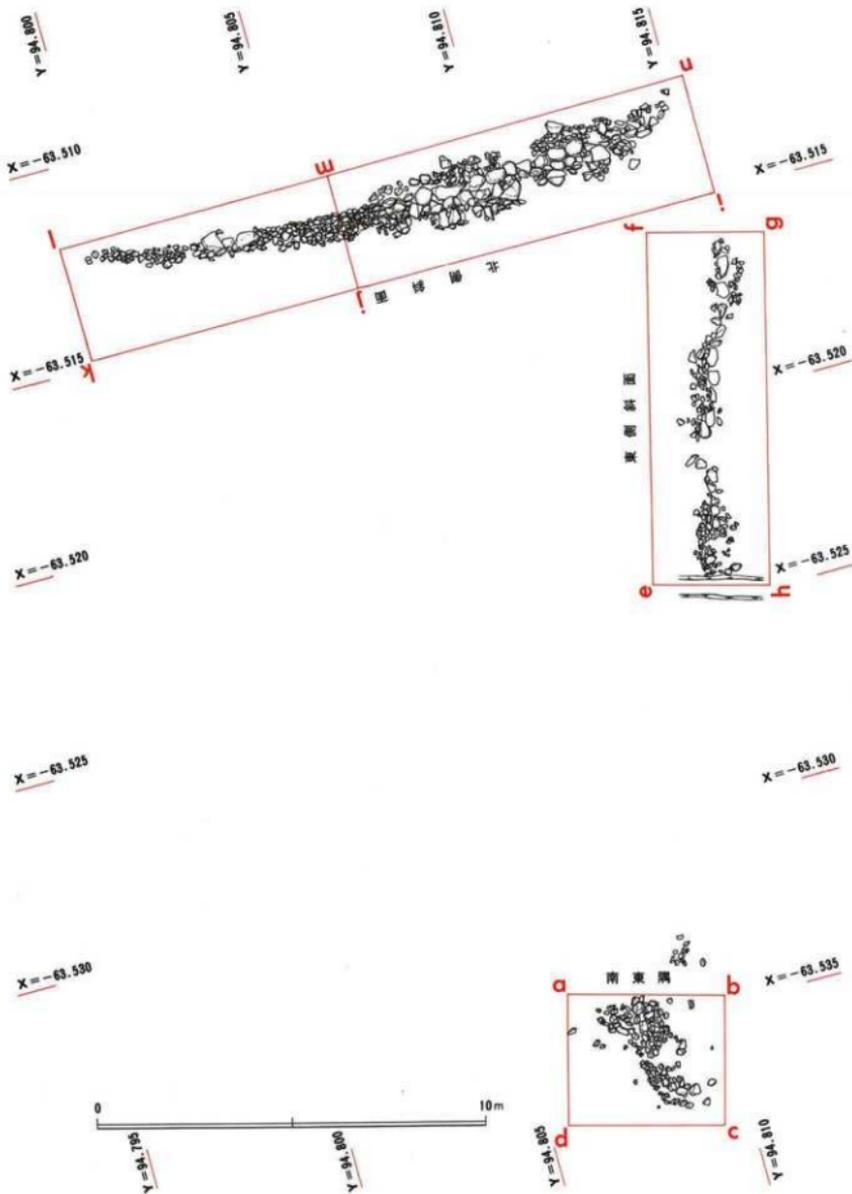
第6图 塩津山1号埴調査前地形測量図 (S=1/200)



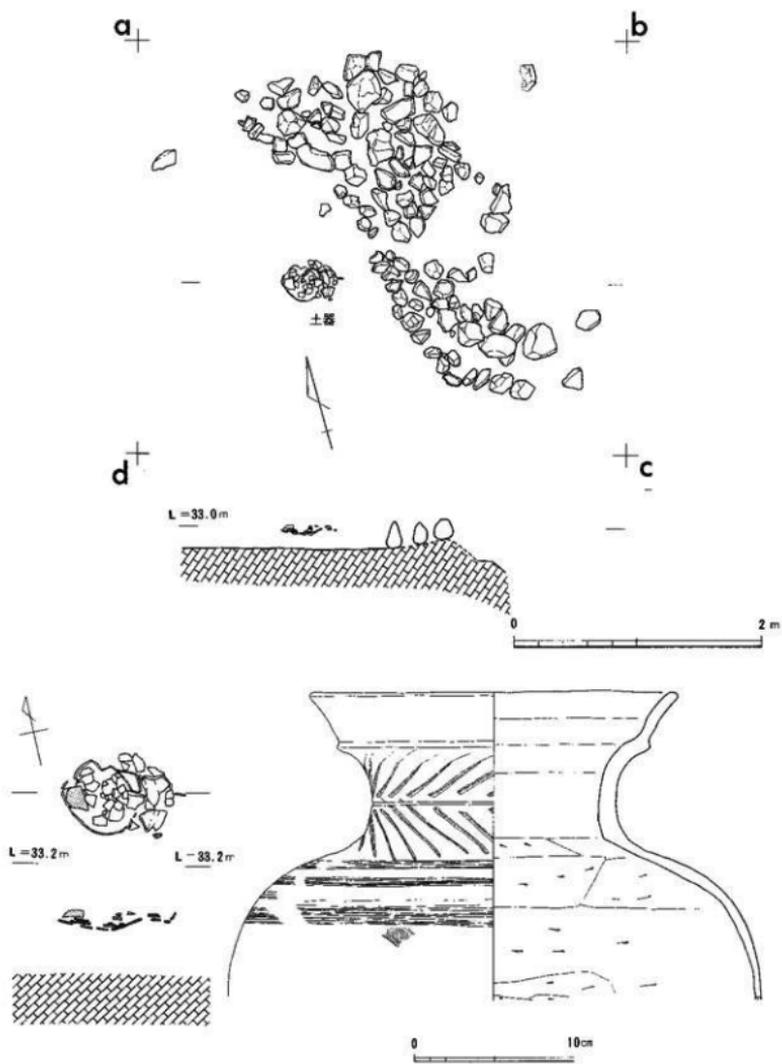
第7图 塩津山1号填調査後地形測量图 (S=1/150)



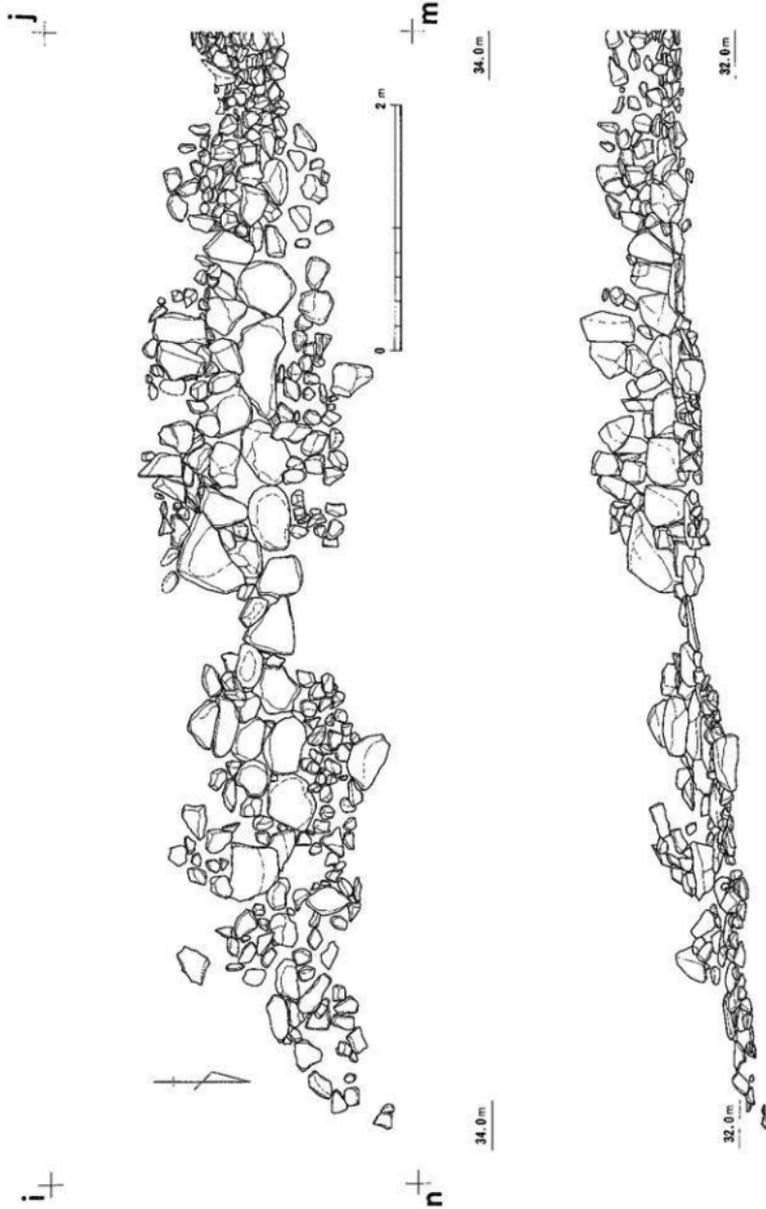
第8図 1号墳南北および東西方向土層図 (S=1/150)



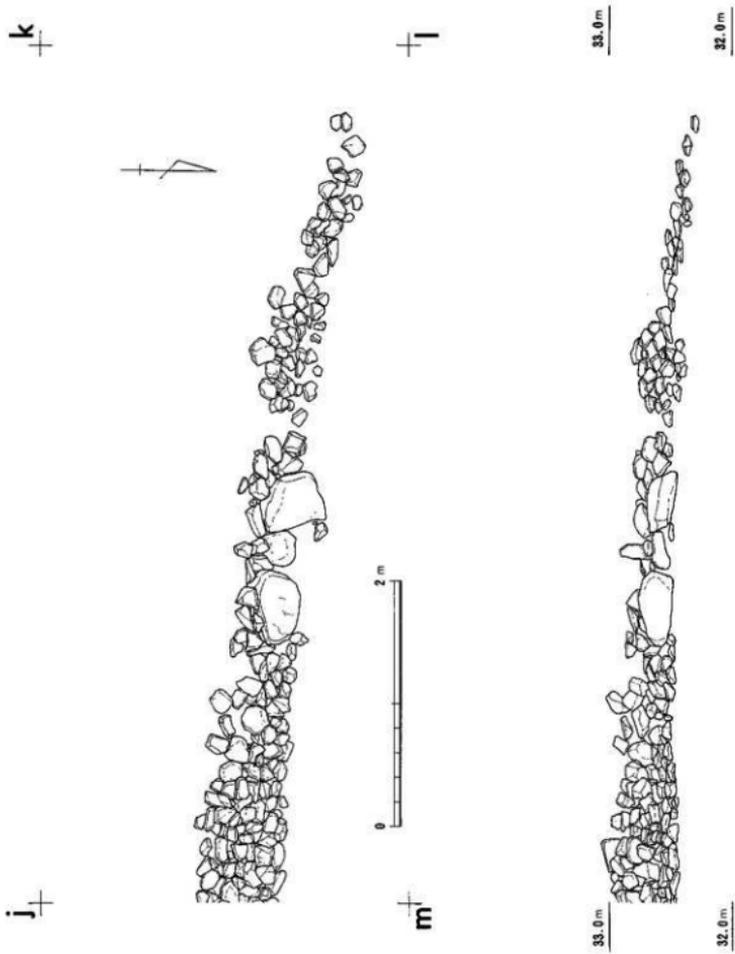
第9図 1号境外表施設平面図 (S=1/125)
 (アルファベットは第10図~13図と共通)



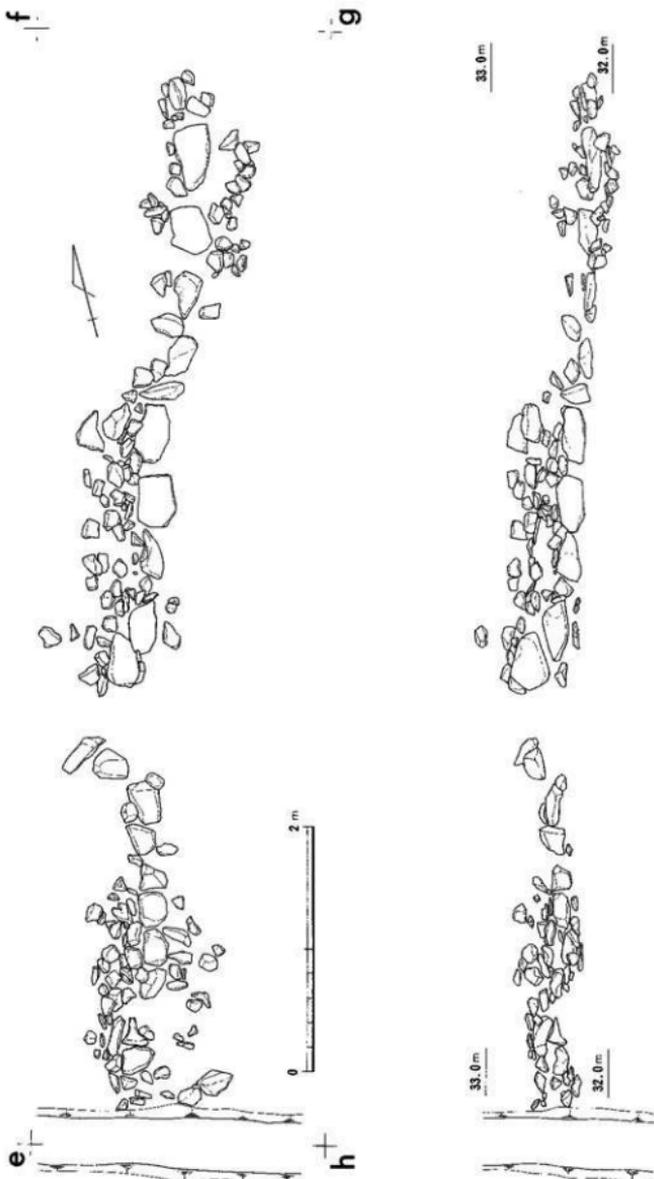
第10図 1号墳南東隅外表施設(上図S=1/40)・土器検出状況(下左図S=1/20)および土器実測図



第11図 1号墳北側斜面外表施設平面図および立面図(1) (S=1/40)



第12図 1号墳北側斜面外表施設平面図および立面図(2) (S=1/40)



第13図 1号墳東側斜面外表施設平面図および立面図 (S=1/40)

③主体部の調査

墳頂部の6箇所で確認した。墳裾には別の墳丘である4号墳が存在する以外に、1号墳に從属するような埋葬施設は確認していない。

主体部はいずれも墳丘長軸に直交する東西方向を約16度北偏する方向に長軸を採るものである。幾つかは、墓壇に切り合いが認められ、墓壇間には新古がある。最も古いものは、墳頂平坦面の中央からやや北寄りの位置で検出した第1主体で、墓壇規模も最大であり、この墳丘の築造の契機となった中心埋葬であると考えられる。第1主体の直上やいくつかの主体部の埋土上面で土器片が出土していることから、埋葬にともなって土器の供献が行なわれたものと思われる。供献土器は第1主体上面を除き、墓壇ごとにとまもりが見られず散乱した状態であり、供献時の状況を残しているとは考え難い。第1～4主体は、内部に木棺が納められていると想定されるが、第5、6主体は1m未満の壺や器台を棺に用いた土器棺葬である。

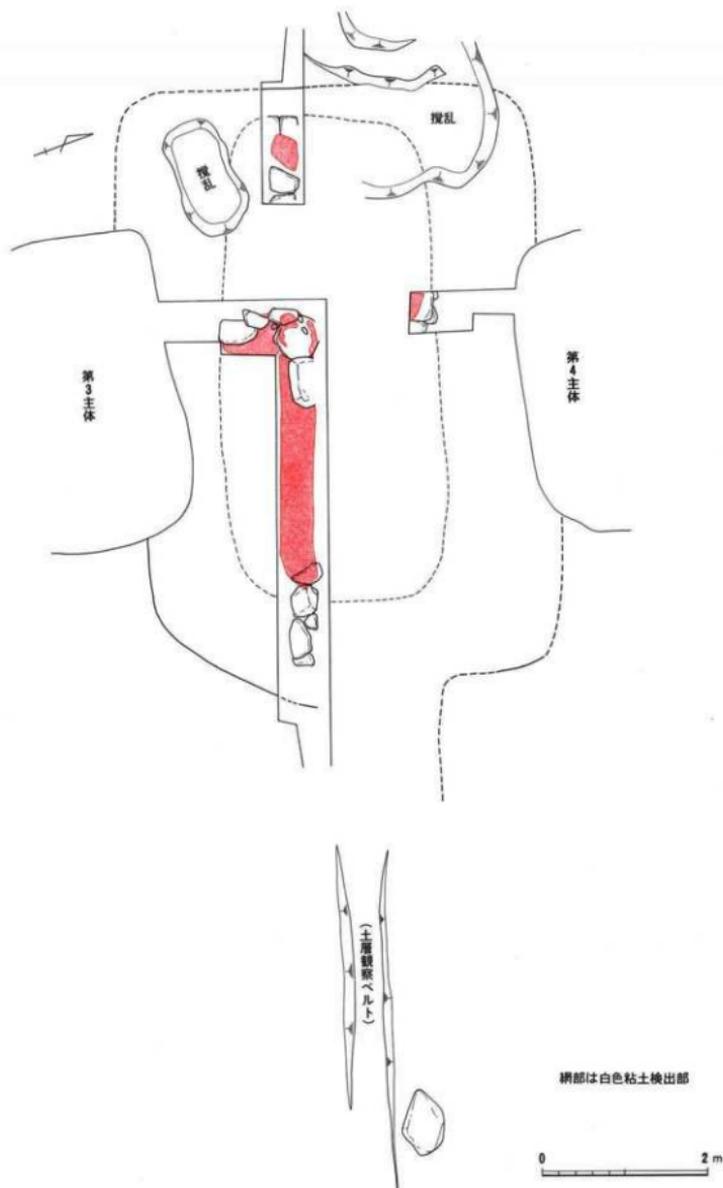
なお各主体部の内容については表2にまとめる。

第1主体（第14～16図）

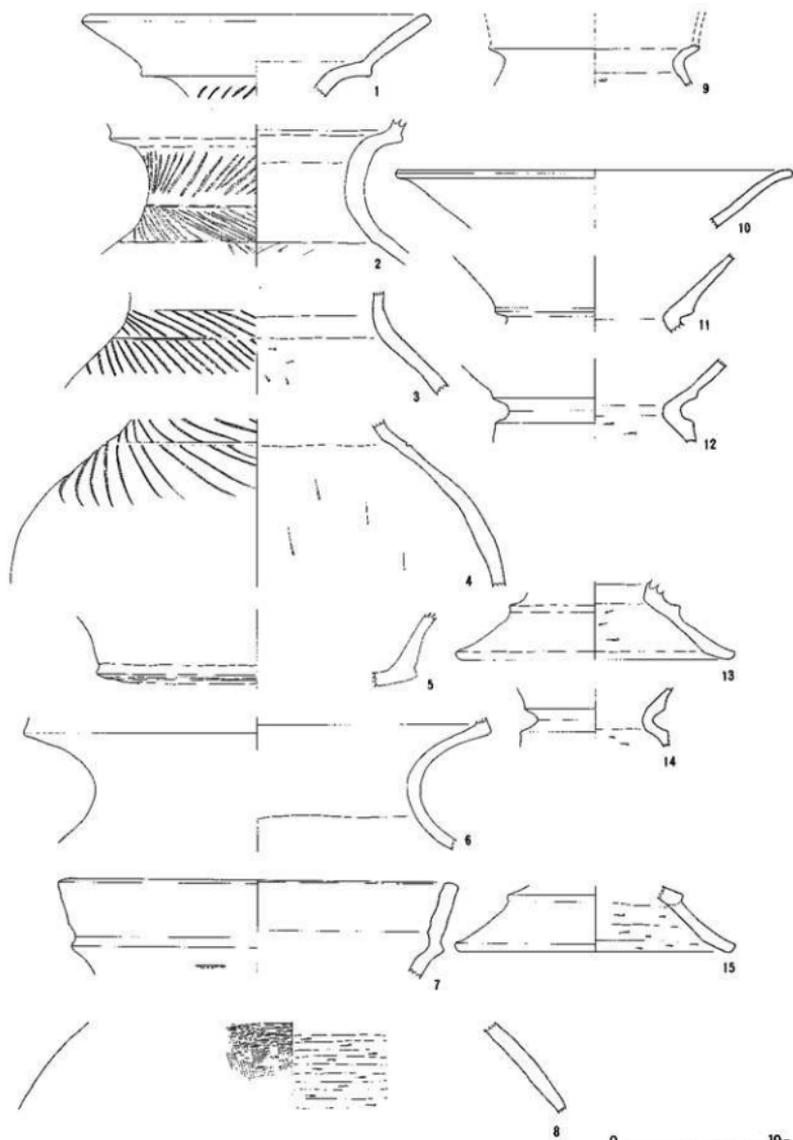
墳頂平坦面の中央からやや北側に寄った位置にある竪穴式石槨を内部主体に持つ、1号墳の中心主体である。調査は墓壇の輪郭の検出と、竪穴式石槨の規模・埋土の堆積状況を確認するための部分的なトレンチ調査のみ実施し、詳細な石槨構造や内部調査は行っていない。

墓壇は、墳丘築成後に削削されたもので、長軸7.5m短軸5.1mを測る。墓壇底を調査で確認していないため深さは不明であるが、墓壇掘り込み面から約1m前後の深さと想定できる。墓壇の一辺は東側斜面へ開口し、排水施設かと思われる。墓壇の平面形は、隅丸の長方形で規模は7.5mと1号墳で最大である。墓壇の形状は、途中で小段を有する二段墓壇である。二段墓壇の上段は、攪乱を受けている西側は不明であるが、第3、4主体で切られている南北方向でも上段に相当する狭い平坦面が観察できた。東側では小さく緩い傾斜を以て50cm幅の段を検出した。二段墓壇の上段は、石室天井石のレベルとほぼ一致する。墓壇埋土上面では供献土器が集中して出土した。土器は器面が荒れ、小片の状態でも出土しており、一個体を復元できる土器は認められない。

石槨は、墓壇と同様の主軸を採り、土器が集中して出土した西半側でより高いレベルで天井石が検出され、東側へと緩やかな傾斜で下がっている。壁体裏込めの石材は、天井石と同様の石材が用いられ、ほぼ垂直に積み上げられている。稀に拳大の川原円礫が混在している。墓壇壁と石槨壁体裏込めとは密着しておらず、間は土で埋められている。特に東側では、1mの空間が土で埋められている。天井石の上面には白色粘土が充填されている部分があるが、粘土は全体を厚く覆い包むものではなく、石と石の空間を充填する程度のものである。白色粘土で充填された直上面には薄く白砂が検出された部分があり、特に石槨の西半側に観察された。石槨



第14図 1号墳第1主体実測図 (S=1/60)



第15图 1号墳第1主体上出土土器実測図(1)



第16図 1号墳第1主体上出土土器実測図(2)

の主軸方向に沿って設定した東西方向のトレンチでは、東端で墓墳基底に敷いたと思われる扁平な石を検出している。

遺物は埋土上面で出土した土器のみである。

出土土器は何れも小片で出土し、風化が著しい。接合できる資料も少なく、図上復元できるものも限られていた(第15・16図)。図化出来なかったものも含めて少なくとも鼓形器台5〜7、高坏5、低脚坏5、甕3、壺6個体認められ、合計20個体以上供献されていたと考えられる。土器の色調は、ほとんどが明黄褐色で淡黄褐色のものも見られる。これらの時期は山陰土器編年⁽¹⁾の小谷式の特徴を呈すものである。

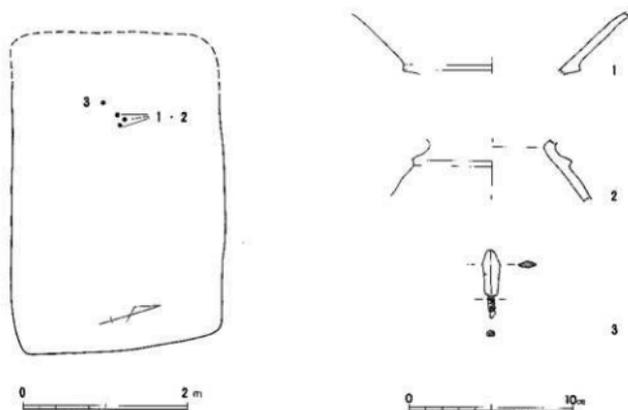
第2主体(第17図)

墳頂平坦面の西側、他の主体部との切り合いは認められない主体部である。調査は墓墳の掘り方を検出するのみで終了しているため、内部施設は不明である。墓墳の掘り方は3.8m×2.4mで他の主体部と同様に東西方向から18.5度北偏する方向に主軸を採る。墓墳の西端は果樹の植え付け穴によって壊されており、これにより内部施設で白砂が用いられていることが確認できた。墓墳上面では小さく壊れた土器片が数片出土しているが、一個体に復元できるものは無く、供献時の状況を示すものかは疑問である。土器と共に埋土上面で銅鐵が出土している。

出土土器は、高坏脚部破片、鼓形器台片などの小片が出土しているが、いずれも細片である。銅鐵は1点のみ出土している。柳葉式に属し、峰部先端は山形で、基部は破損が著しいがやや凹状を呈するか。身長は4.1cm、最大幅1.1cm、厚さ0.35〜0.4cm。峰部断面は、一面には稜線があり山形を呈しているものの、一面は緩い凸面レンズ状を呈する。基部は途中で欠き、樹皮が付着している。類例は銅鐵ではないものの、鉄鐵では佐賀県西一本杉遺跡S T 009古墳の例と共通点が見られる。⁽²⁾

第3主体(第18〜21図)

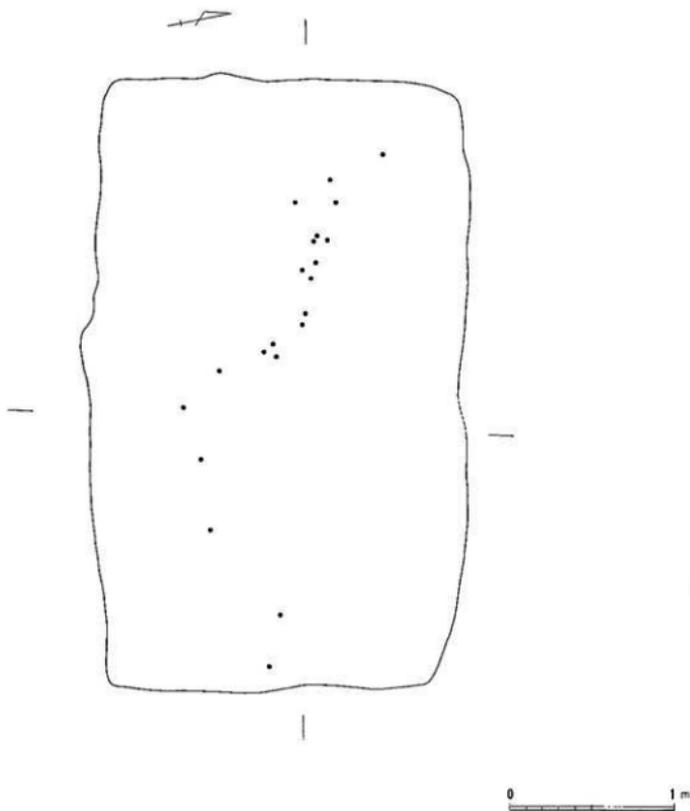
第1主体の墓墳の南側を切って造られた主体部である。墓墳の平面形は隅が丸い長方形で、途中に段を有する二段墓墳である。規模は3.7mで掘り込み面から基底面までは深さ80cmである。墓墳の埋土上面には土器片が散乱していた。内部施設は、割竹形木棺を川原円礫で包み、上部を白砂で厚くバックしたもので、「砂礫塚」とも言うべき構造である。木棺は朽ちて残



第17図 1号墳第2主体検出状況 (S=1/60) および上面出土遺物実測図

存していなかったが、棺痕跡を残す棺側礫を検出した。棺は割竹形木棺で、外法長さ270cmの規模である。直径は西側が最大で50cm、東側が最小で20cmである。両小口は垂直に立ち上がる。墓壇底は東側に下がる緩い傾斜を持って平らに整えられ、基底面全体に川原礫と白砂を敷き、棺床を整える。木棺をこの直上に据えた後、棺側に川原円礫を隙間なく詰め込む。調査で検出した棺痕跡はこの状態を残しているものと思われる。棺はほぼ正円に近い断面形を呈す。川原礫は原位置を保っており、棺内に転落している石もほとんどないことより、棺側の礫は棺全体を覆い隠すものではない。木棺の内部には、刀子1本が遺体に副えられ、棺あるいは遺体の頭～胸位部分に約30cmの範囲で赤色顔料が検出された。赤色顔料は、非常に鈍い赤色で、白色砂が赤く染まっていた。肉眼での判別は困難で、地山が鮮やかな赤褐色を呈することもあり、人為的に塗布されたものでなく埋葬や調査の途中で地山土が混入したこと由来する可能性も考えられたが、分析の結果、微量の水銀朱が検出された。棺側の川原礫の上面は棺が安置された後、土を置き、後に砂を掛けるための作業面を造り出している。この上部に厚く砂が掛けられ棺を覆い隠したのち、土で埋め戻され、埋葬は終了している。白砂の検出は両小口部分が高く盛り上がり発見された。

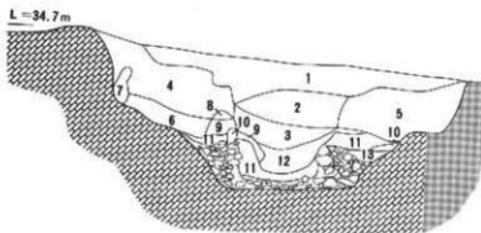
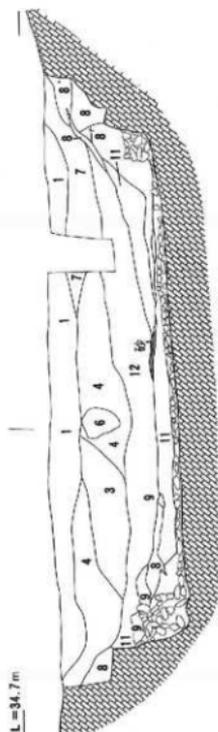
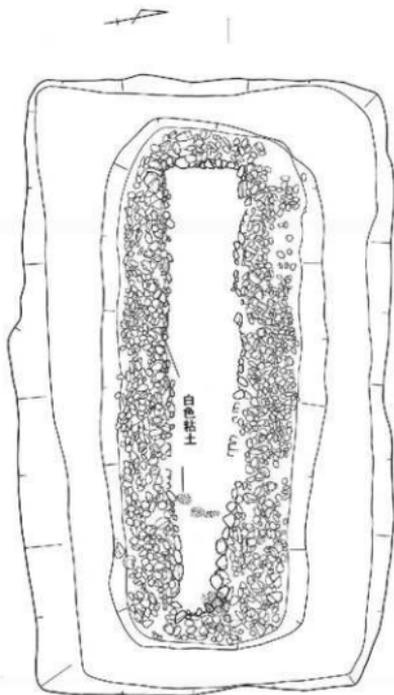
以上より次のような埋葬順序が想定できる。①墓壇を掘り込む。この時第1主体は埋葬を終え埋め戻されている。②墓壇基底に拳大以下の川原礫と白砂を敷く（礫と砂との前後は明らかではない）。③割竹形木棺を②の上に直接安置し棺内に副葬品が納められ赤色顔料が塗布される。④墓壇と木棺との間に川原礫を充填し、棺を固定する。⑤棺蓋が完全に隠れない程度に充



第18図 1号墳第3主体上面土器出土状況 (S=1/30)

填された川原礫の直上に、小口部を除き土を置き、二段掘りの上段と連続するように水平面に均す。⑥⑤の面を作業面として棺上に白砂を厚く掛け、棺を完全に隠す。⑦墓墳を土で埋め戻す。⑧⑦上に土器を供える。以上の内部主体と同様な例は、島根県八束郡東出雲町寺床1号墳⁽³⁾においてのみ確認されている。

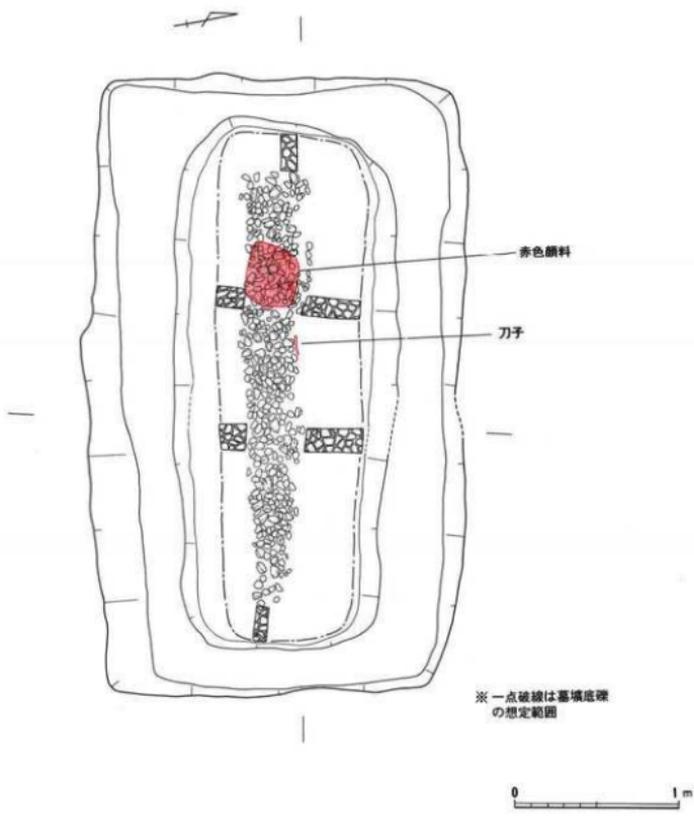
主な出土遺物は、埋土上面の供献土器と棺内副葬品の刀子1本である。図化出来なかったが、東側小口部棺側の川原礫を断ち割る際に、土師器甕体部の小片が出土している。刀子は、厚く錆びに覆われているが、一部に布状の付着物が残存していた。刀身は4.1cmで、刃部の基部に片削りに関部がある。供献土器は壺甕等が見られる。いずれも器面は著しく風化を受け、出土状態も一箇所に集中せず、散乱していることより、他の主体の供献土器が混入していることも考



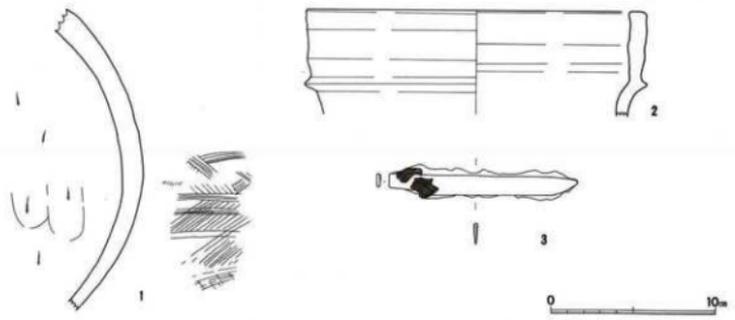
1. 黒褐色土
小礫まれに含む。炭化物小片微量に含む。しまりあり。
2. くすんだ茶褐色土
鮮かな七色の小礫やや多く含む。黄色斑薄く有りやや軟かい。
3. 4層のやや軟らかい土
4. 黄斑褐色土
七色の礫を微量に含む。よくしまっている。こがし大の地山礫を含む
5. 紫褐色土
七色の小礫多く含む。白色短子多く、こがし大の礫を含む。
6. 粘性のある茶褐色土
黄斑全くなし。よくしまっている。
7. 茶褐色土
やや軟かく、混入物なし。
8. 混土砂層
中心の方は、ほぼ純粋な砂。
9. 黄斑混褐色土
10. 青白色粘土
11. 砂層
12. やや蒸かかった茶褐色土
黄斑微量に含む。しまりなく軟かい。
13. 地山の土をつき固められた層

0 1 m

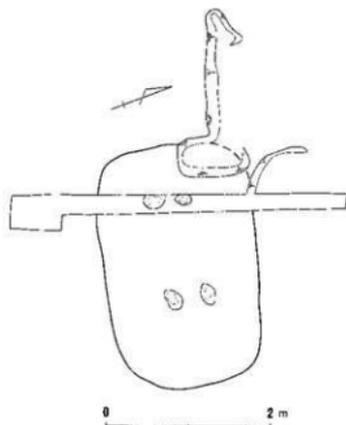
第19図 1号墳第3主体棺側掘検出状況 (S=1/30)



第20図 1号墳第3主体墓墳底礫・棺内遺物検出状況 (S=1/30)



第21図 1号墳第3主体上出土土器・棺内出土遺物実測図



第22図 1号墳第4主体検出状況 (S=1/60)

えられる。

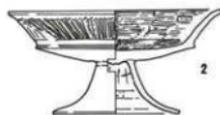
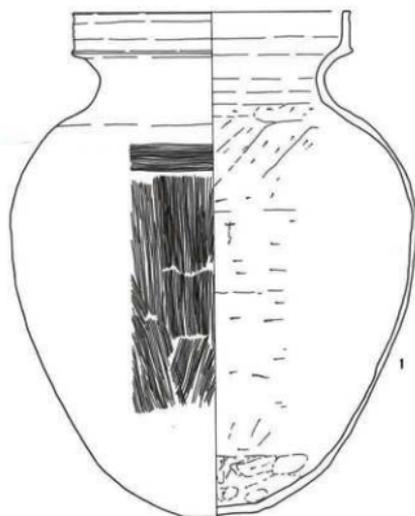
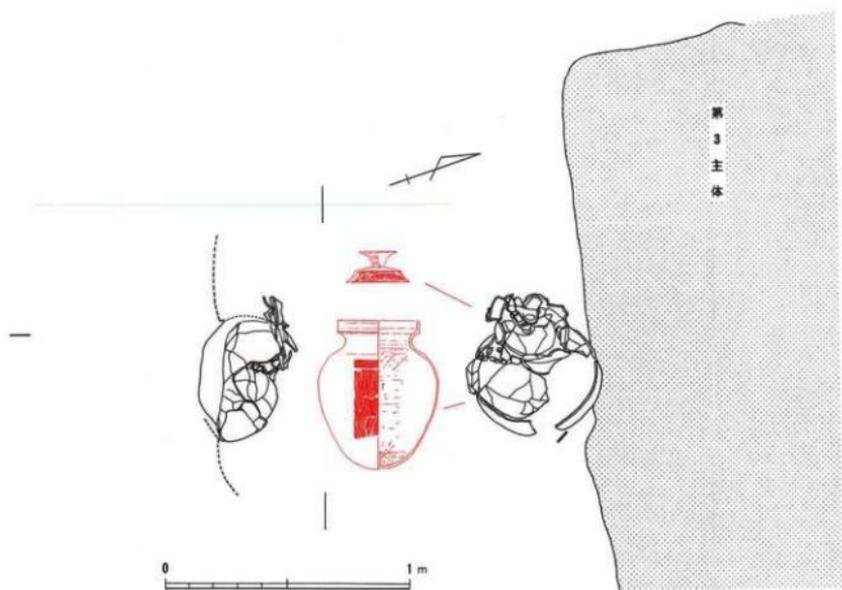
第4主体 (第22図)

第1主体の北側の一部を切って造られた主体部である。墓壇の掘り形は不整形な小判形を呈し、墳丘盛土上から掘り込まれている。調査は埋土上面と掘り方を検出したのみである。墳丘断ち割りトレンチが主体部にかかっている。これで見ると、棺の上面には白砂があり、棺側には人頭大以上の礫が用いられている。墓壇は第1主体を埋め戻したのちに掘り込まれている。

第5主体 (第23図)

第3主体の一部に重なる位置で検出された。棺に大型壺形土器を用いた土器棺葬である。現地表面を数cm掘り下げたところで、壺棺の一部が出土した。本来は墳丘盛土面から掘り込まれた墓壇に高坏で蓋をした壺棺が口縁部を西に向け埋納されたものと考えられるが、墓壇の掘り方や埋土を確認することはできなかった。棺は高さ約60センチメートルの大型壺形土器で、他の埋葬と同じく東西方向から18.5度北偏した方向に主軸をとる。壺は口縁を西に底部を東に向けた横倒しの状態で、口縁部は高坏形土器で蓋がされていた。口縁と蓋は埋納時の状況を残しており、坏端部が壺頸部の内面に接して出土した。壺の胴部は土圧で潰れており、内部にはやや軟質で炭小片が混入する土が充満していた。副葬品は壺内外からとも出土していない。

壺形土器は、高さ63cm、胴部最大径50cmと大型のものである。複合口縁を呈する口縁部は厚手で、ほぼ垂直に立ち上がり端部は水平面を持つ。外面は頸部以下に細かなハケム調整が見られるだけで文様は認められない。内面は頸部以下ヘラ削り調整で、特に頸部以下は厚さ1cm以下と大きさに対してかなり薄く仕上げられている。底部は正立は不可能であるが、直径10cm程の平らな面が作られ、内面にはケズリ後の強いナデや指頭瓦痕が見られる。高坏は、坏部直径26cm高さ12.5cmで坏部に明瞭な段を有するものである。杯部の内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。坏部と脚部の接合は、それぞれを別にして作って接合するもので、円盤が充填された内面には小孔が2個開けられている。

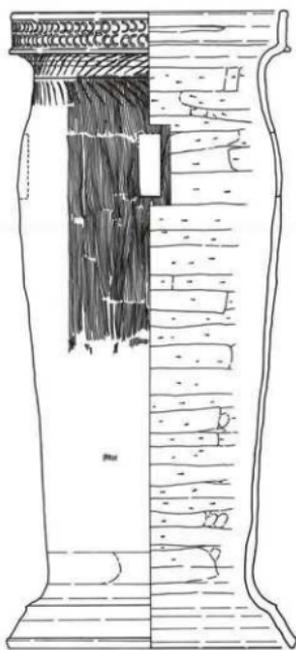
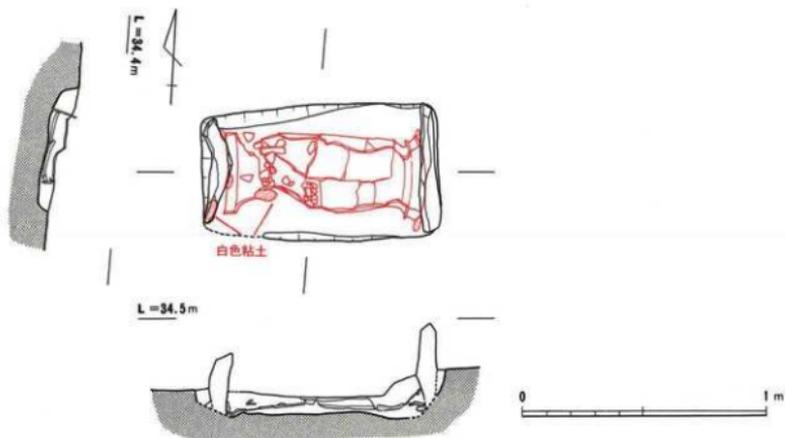


第23図 1号墳第5主体検出状況および土器実測図

第6主体（第24図）

墳頂平坦面の北西に偏った位置で検出した、円筒器台形土器を棺に用いた主体部である。1 m × 0.5 m の小判形の掘り形の土壌内に、高さ83cmの円筒器台形土器を西側に口縁部を置き横倒しに寝かせて納め、器台の上下端は扁平な自然石を立て塞がれ石と土器の隙間は白色粘土で塞がれていた。遺構は、後世の攪乱を大きく受けており、墓壇の一部は最近の果樹の植え付け穴によって一部が壊され、上部は小口部に配された扁平な立石の上端が一部地表面に露出するまで削平されていた。墓壇は墳丘盛土上から掘り込まれ、墓壇底においても地山面まで達していない。他の主体との切り合いは認められず前後関係は不明である。墓壇と土器の主軸はほぼ一致し、他の主体部と僅かに異なるものの、東西方向からやや偏った方向という点では共通している。墓壇の底はやや凹凸を持って掘られていて、扁平な石を立てた部分については石を抜き取っていないため不明である。円筒器台は1/2が削平され不明であるが、墓壇に接する下半が遺存していた。調査時には、当初、口縁形態の異なる2個体の器台形土器を一部入れ子状にして棺にしているものと判断していたが、根等により一部が重なりあったものと分かった。

円筒器台形土器（第24図）は、高さ83cm胴部最大径38cmで、口縁部は垂直に立ち上がる複合口縁を呈す。脚部にはハの字状に開く複合口縁状の脚台が付く。外面の口縁部と頸部には文様が施されており、口縁にはC字状の原体を用いたスタンプ文が廻っている。頸部には幅5cmの工具による綾杉文と1条の沈線文が廻る。また4方向に長方形の透しが認められる。透しは1段のみで、胴部の最も直径の大きい位置のみである。外面調整は、口縁部と脚台部のヨコナデを除いて胴部は繊細な縦方向のハケメ調整である。内面調整は、ヨコナデ部分を除いて横方向の丁寧なヘラケズリである。器面は1cm以下と非常に薄く整えられている。外面には赤色顔料の塗布が認められ、口縁部から脚端から10cm程のところまでは肉眼で確認出来、もとは器面の大部分が赤く塗られていたものと思われる。内面には肉眼では確認出来ない（第37図参照）。



第24図 1号墳第6主体検出状況 (S=1/20) および土器実測図 (S=1/6)

(4) 2号墳の調査

①調査前の状況と調査の概要

2号墳は、1号墳の南側に位置する。調査前は約10m以下の円丘状の高まりが見られ、古墳であることが想定されたため、2号墳と呼称した。調査の結果、2号墳は直径8mの円形の墳丘に幅2mの浅い周溝を持つ円墳で、周溝内には円筒埴輪が配されていることが明らかとなった。

また2号墳の約5m西方の調査区内にも、地表面がやや盛り上がった箇所があり、墳丘と想定し、調査を行った。表土中から円筒埴輪小片や、須恵器片が数点出土したものの(第29図)、現表土を数センチメートル掘り下げた直下から基盤層が表れ、盛土や周溝、主体部も検出出来ず、古墳と考える手掛かりが乏しく、古墳とは呼称せずに調査を終了した。

以下、2号墳について述べる。

②墳丘について(第26図・27図)

古墳は直径8mの円墳で幅2mの周溝が廻る。南側は調査区外となるため墳丘の南端は確認していない。墳丘の東側は斜面に寄って造られたため崩落している。墳丘は盛土の大部分が流失しており、約50cm残存していた。ほぼ水平に検出された地山の上には薄い旧表土が確認された。周溝は浅く、断面U字状を呈す。溝の中央には円筒埴輪が2～2.5m間隔ごとに円形に配置、樹立され、6個体の底部がほぼ原位置を保ち出土した。いずれも直径30cm、深さ10cmの樹立墳の中に据えられていた。周溝内に堆積した濃黒色土層からは、埴輪の小片が多数出土している。これとともに須恵器小片が2点出土している。

③主体部について

調査地内では主体部を確認することはできなかった。墳丘は南北方向に断ち割りトレンチを入れ地山面を確認したが、このトレンチにおいても主体部を検出することはできなかった。可能性としては、盛土の流失とともに土壌内に棺を据える形態の主体部も流失したか、調査区外の南側斜面から横穴系の主体部が存在するかどうかであろうが、出土遺物の年代から前者と考えるのが妥当である。

④出土遺物について(第28図)

周溝内に樹立され、ほぼ原位置を保って出土した円筒埴輪(第28図1～6)、小さく壊れて周溝内で出土した円筒埴輪片(7、8)、形態不明の埴輪片(9)、須恵器片(10、11)がある。

1～6の円筒埴輪は、すべて基底部から胴部までしか復元出来ず、タガの形態は第1段タガしか分からなかった。周溝から出土した円筒埴輪片もこれらに共通する特徴が見られる。共通する特徴は次の通りである。色調は明るいオレンジ色で、稀にやや黄色がかった破片もある。器形は基底部から口縁部に逆ハの字状に開くもので、胴部に円形透孔が1方向のみ確認できる。タガは一次調整ハケメの後、貼り付けられ、ヨコナデ調整で仕上げられている。タガの突出度は低く、台形から三角形に近いものもある。調整は、外面はハケメ・指ナデ・指頭圧・ヨコナ

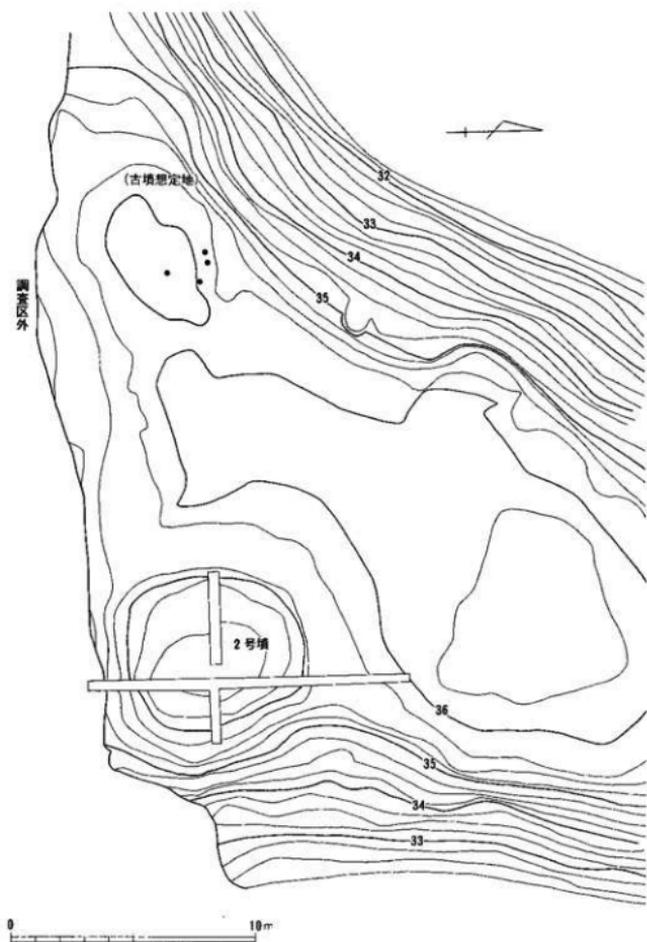
デを基本としている。内面は口縁部でハケメ、胴部～基底部ではハケメは見られず、ユビナデ、指頭圧、ヨコナデ調整を施す。底部調整は、顕著ではなく、ほとんど先細りせず一定の厚さを保っている。基底部の内外面を指で押さえることによって底部を調整する際に若干のナデが加えられている程度の調整は行われているもののハケメやヘラケズリによる調整痕跡は認められない。口縁端は水平に近い面をもって薄く外反する。9は形態が不明の小片であるが、厚さや調整、胎土・色調が円筒埴輪片と似通っている。基底部は円筒埴輪と同様で明瞭な調整は認められない。内面は、ユビナデや指頭圧痕がみられる。外面にはヘラ描きの沈線文が格子状に見られ、形象埴輪の一部ということも考えられよう。

10・11は須恵器の小片である。10は壺の口縁部と見られ、口径は16cmである。口縁端は小さく段を持つ。細かい単位で施された波状文は口縁端方向から3単位が重なり合っている。11は壺か甕の体部の一部と見られ、細かな波状文が施されている。

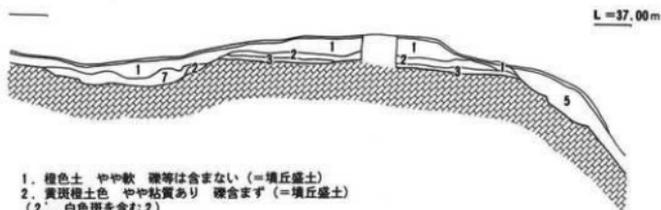
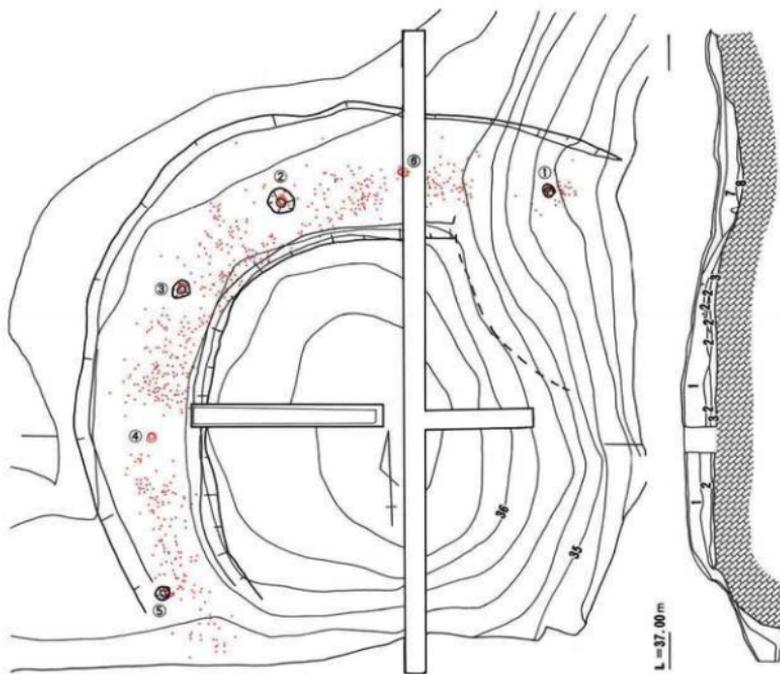
これらの遺物の特徴は古墳時代後期でも古い様相を持っていて、当地域の山陰須恵器編年の⁽⁴⁾1～2期にあたる。

表2 塩津山古墳群主体部一覧

土体墓名	墓 塚 (単位:m)				棺 (単位:m)				排水量 (単位:m)
	長	短	深さ	全長 (外+蓋版のみ)	内りのり	幅 (頭部)	幅 (足部)	高さ	長さ
1号墳									
第1主体									
第2主体									
第3主体	3.665	2.100	0.800		2.580	0.460	0.160	0.210	
第4主体									
第5主体				0.590					
第6主体	0.960	0.540	0.395	0.800		0.300		0.395	
2号墳									
4号墳									
第1主体	3.650	0.890	0.472	2.980	1.945	0.500	0.500	0.190	2.740
第2主体	4.050	1.825	0.260	2.490		0.540		0.290	2.230
第3主体	3.100	1.000	0.500	2.660	2.510	0.500	0.305	0.310	1.460



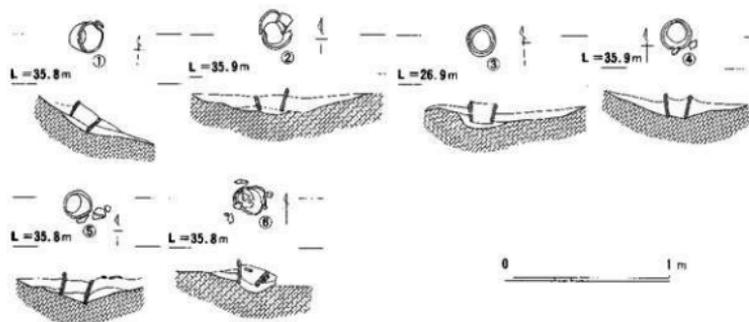
第25図 塩津山2号墳調査後地形測量図 (S=1/200)
 (古墳想定地ドットは遺物出土位置)



1. 橙色土 やや軟 礫等は含まない (= 墳丘盛土)
2. 黄斑橙土色 やや粘質あり 礫含まず (= 墳丘盛土)
(2' 白色斑を含む2)
3. 黒土色 礫含まず 軟 礫なし
4. 淡黄色土 = 地山掘りすぎ
(4' = 礫を含む地山)
5. 橙褐色土 しまりなくバサバサ = 二次堆積
6. 橙色土
7. 濃黒色土 (周溝の埋土) 粘質強くハニワ片多量を含む
8. = 6



第26図 2号墳埴輪出土状況・調査後地形測量図 (S=1/100)



第27図 2号墳円筒埴輪出土状況

(5) 4号墳の調査

①墳丘について

4号墳は1号墳に並んで尾根上に立地する。

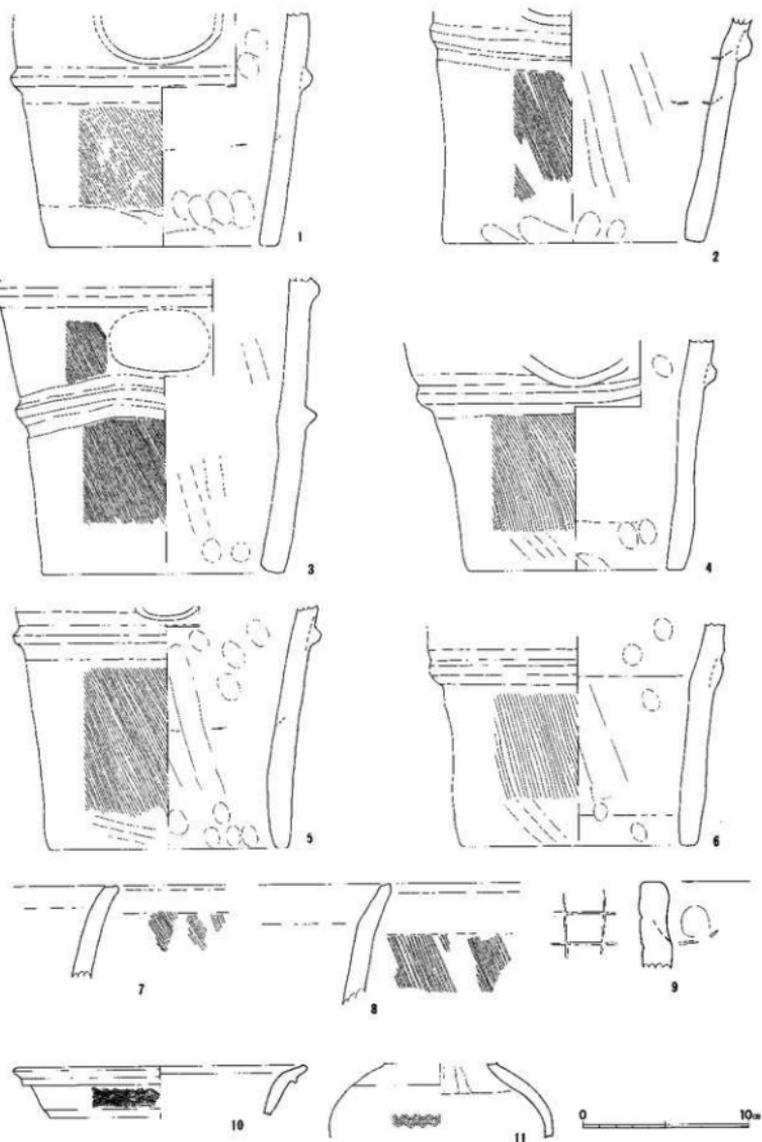
墳丘は細い尾根上に盛土で構築されたため盛土のほとんどが流失しており、墳形や外表施設、規模を明らかにすることはできなかった。現表上を数cm除去しただけで主体部の一部と排水施設の蓋石が表れた。墳丘を区画したり、尾根から切除してできる溝状遺構や墳端のテラス面は検出していない。

②主体部について

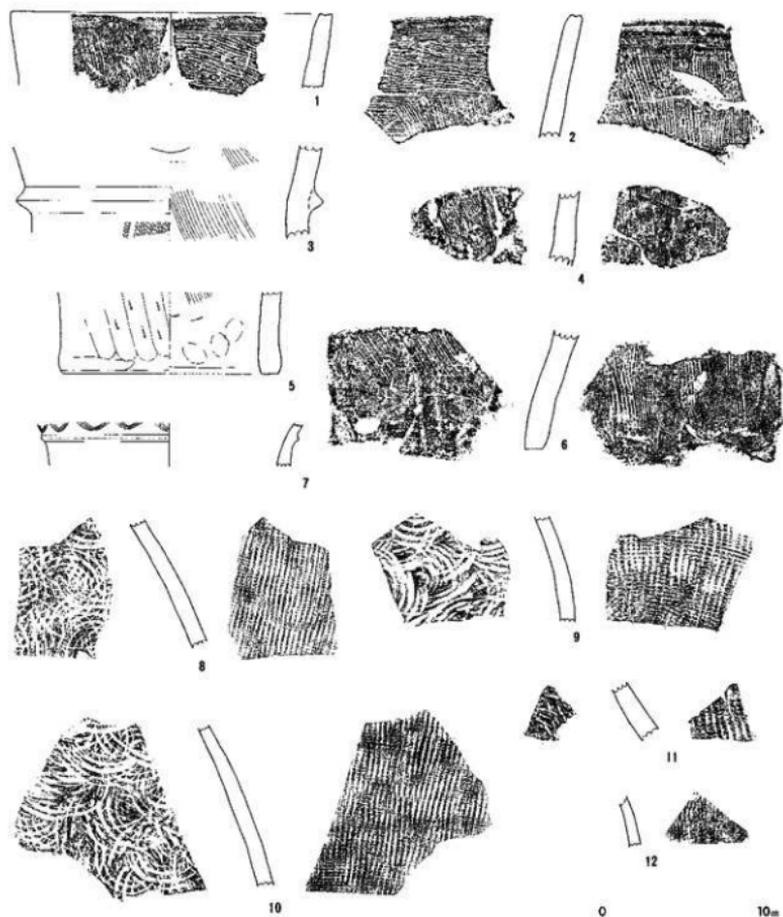
主体部も上半が流失しており、棺蓋上に播かれていた白砂が広く主体部外に流れ出していた。主体部は3基を尾根筋に直行するように並んで検出した。何れも墳丘盛土上面から掘り込まれていたようで、上部は流失して発見順に尾根の先端側から第1・2・3主体と呼んだ。各主体に切り合いは見られず、前後関係は不明である。1号墳との前後関係については最も近接している第3主体が削られていないことより、1号墳に先立って作られたものではない可能性が高い。各主体部上では土師器片が少量出土し、第1・2主体上では壺形土器の体部が出土している。

第1主体 (第30・31図)

1号墳と最も離れた位置にあり、3つの主体の内、最も高い位置でもあるため、最初に発見された。墓壇は尾根に直行する方向に主軸を採り、方位はN-45°-Wである。検出面で幅0.8m長さ3.5mの規模を持つ。北西に頭位を取り、反対側には墓壇の一端が開口し、長く排水施設が延びている。主体部の内部構造は、白砂・川原円礫・角礫を用いて組合せ式木棺を保護する構造である。墓壇底は頭位方向が若干高く、排水施設へと緩く傾斜している。墓壇底には川原円礫で平らに整える前に、排水施設を整えており、棺の直下に当たる部分からも扁平石を用



第28图 2号填出土遗物实测图



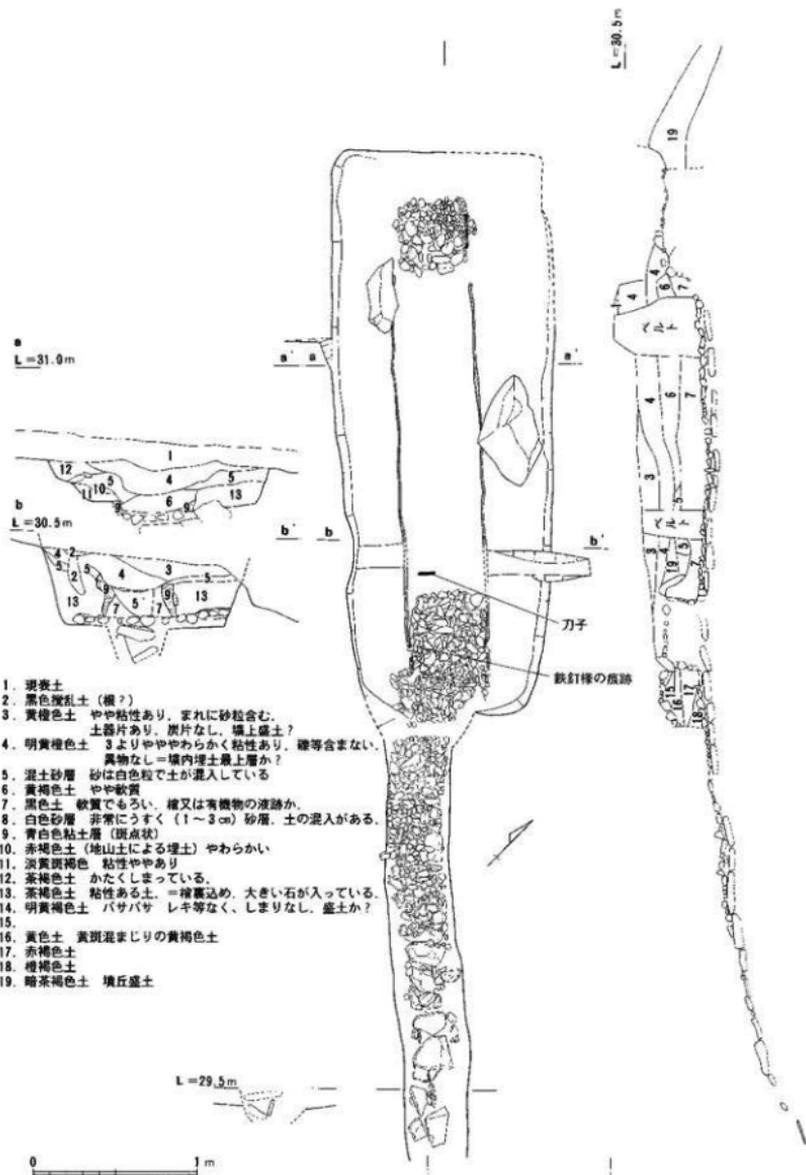
第29图 2号墳西侧古墳想定地出土遺物実測図

いた排水施設の蓋石が見られる。排水施設は墓壇の掘り込みとともに溝を掘り込み、断面でV字状を呈すように扁平石を立て掛け、その中に部分的には川原円礫を配し、扁平石で蓋をし、完成する。排水施設を付設した後、棺を据えるために川原円礫を用いて墓壇底を整えるが、この円礫はほぼ墓壇底の範囲一面に拡がっている。また、川原円礫は、墓壇外に延びた排水施設の墓壇に近い部分の蓋石上にも認められることから連続的に作られていることが分かる。円礫の付設と前後して、白砂が薄く捲かれたようで、円礫を検出したのと同様な範囲で白砂を検出した。棺の形態は板材を用い、側板で小口板を挟み込む組合せ式の木棺である。側板の下部を固定したと見られる白色粘土が細く帯状に認められる。小口部の棺外には長い側板に挟まれて小さい空間ができ、川原円礫が充填されている。同様な例は鹿島町奥才墳墓群⁽⁵⁾で見られる。棺外は小口部は円礫が充填され、両側板外には大型の角礫を用い、側板を固定し、その外の空間を土で埋めている。この土の上面はかなり固く締まっており、棺を据えた後の作業（例えば遺体や副葬品の収納）の作業面として機能した可能性がある。棺内には、排水溝側の小口板に平行して刀子1本が副葬されていた。赤色顔料は肉眼では判別できず検出していない。木棺蓋の上部には白砂が捲かれ、これが、墳丘の崩落によって墓壇外の広い範囲で確認された。

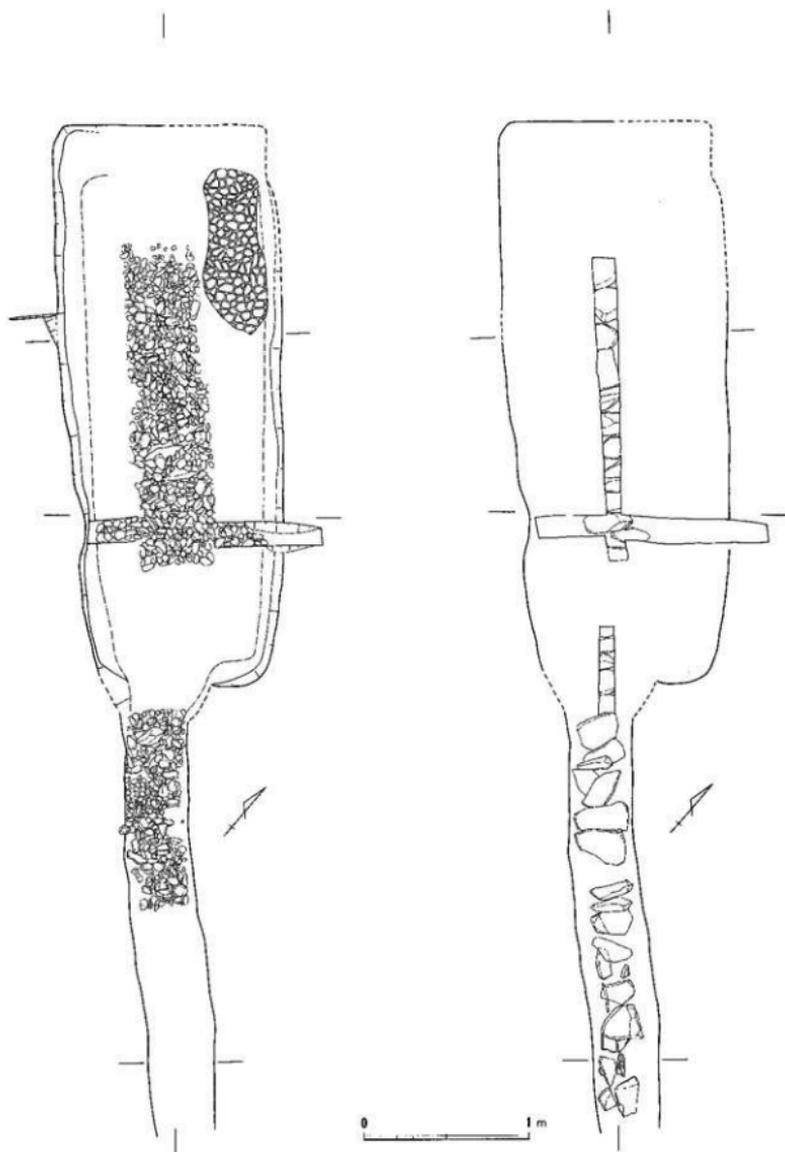
出土遺物は棺内より刀子1本と木米墓壇上に供献された土器破片が少数出土した。第32図1は壺形土器の胴部破片で、外面は細なハケメ内面はヘラケズリが見られる。外面には焼成後に付着した炭が認められるが、現地表に非常に近いところで出土しており、後世付着した可能性も考えられる。

第2主体（第33～35図）

3基の主体部の中心に位置し、墓壇底のレベルが最も低く、規模も若干大きい4号墳の中心的な主体部と考えられる。墓壇は他の主体部同様墳丘盛土上から掘り込まれており、尾根筋に直行する方向に主軸を取る。平面形はいびつな隅の丸い長方形で、墓壇の一端は開口し、溝状に細長い排水溝が付設されている。外部に延びた排水施設の構造は第1主体とはほぼ同様の扁平石をV字状に仕組んで蓋石を乗せたものである。ここでは蓋石が墓壇側から順に置かれたようで、若干重なり合っている。第1主体では排水のV字状の配石構造が棺直下まで付設されこの主体では、外部に延びる部分だけで棺の直下に当たる場所では認められていない。墓壇の底には1主体で用いられた川原円礫に混じって周辺の地山に産する拳大以下のやや角のある礫を用いて墓壇底を整えている。前後してこの主体でも白砂が薄く捲かれ、棺床を整えている。棺は朽ちており、詳細は不明であるが、棺床や棺側の配石構造を見ると底の丸い剣り貫き式の棺であった可能性が高い。棺床を円礫で整えた後、棺を置き、棺側に土や、円礫を用いて棺を固定する。その後棺の周囲に扁平石を用いて竅穴式石槨の基底を構築するように2段から3段積み重ねる。この時、扁平石は棺と接するため棺の外形に制限され、棺が朽ちた後は棺痕跡を



第30図 4号墳第1主体棺側施設・棺内遺物出土状況 (S=1/30)



第31图 4号墳第1主体墓墳底礎(左図)、墓墳底礎除去後検出排水施設検出状況(右図)(S=1/30)

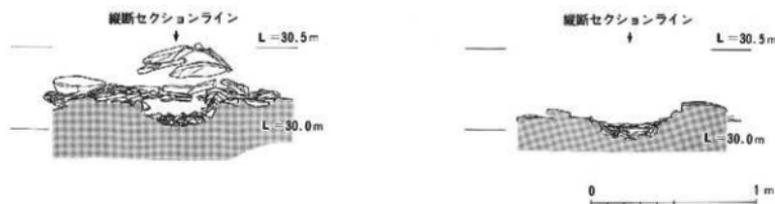


第32図 4号墳第1主体上面・棺内出土遺物実測図

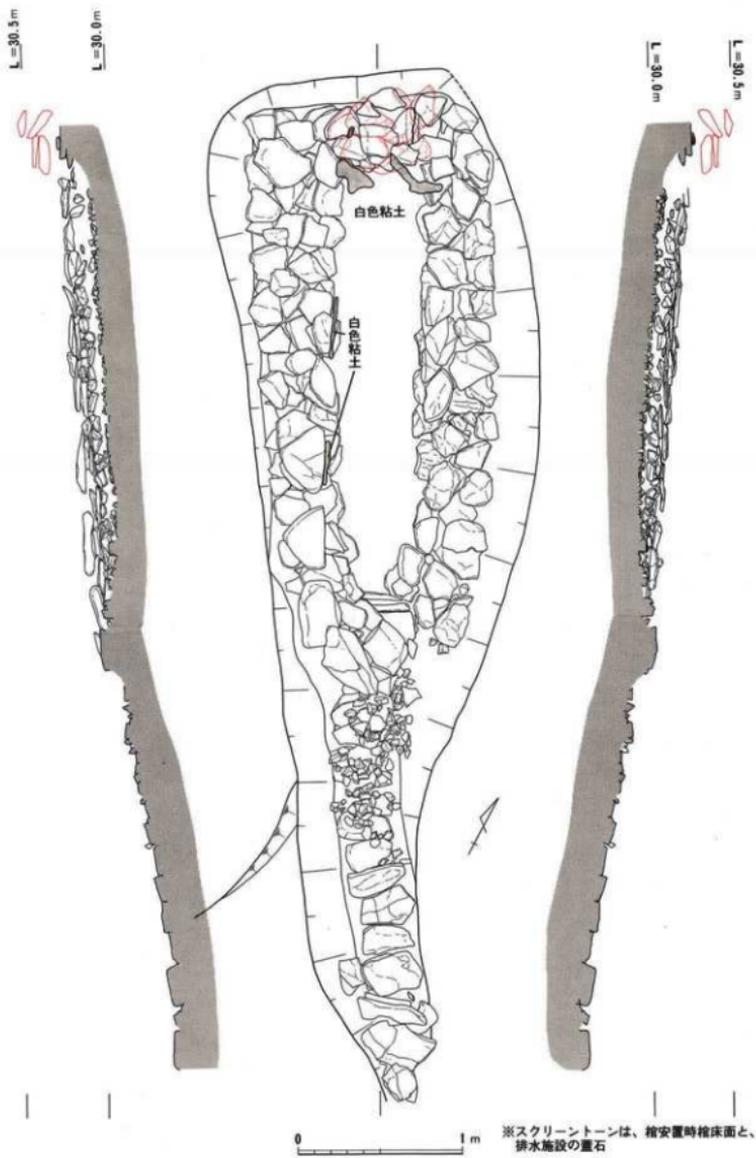
たどる手掛かりとなる。これを見ると頭位部分はほぼ垂直に立ち上がる形態で、反対の脚方向は小口面が明瞭でなく舟底状の形態であったと想像できる。また断ち割り調査を実施していないため想定であるが、棺の脚方向には、棺側の扁平石の両側が交わる位置に同様な扁平石を2～3枚立てて区画しており、墓域内と外部排水施設の付設上の区画であったことも考えられる。棺側の配石構造の上面には部分的に白色粘土が検出されている。頭位部では小口部扁平石上に塊状に、多く認められた。棺の上半部の形態は全く不明である。棺蓋上に置かれたと見られる扁平石が頭位部分で見られた。ちょうど木の根があり、やや本来の位置を動いているが、扁平な石を6枚以上用い棺蓋上に置いていたものと思われる。棺蓋上面には白砂が少なからず用いられた形跡が認められる。副葬品は棺内外とも出土していない。赤色顔料については棺内に堆積した暗褐色腐植土がやや赤みを帯びた部分があったが、直上の埋土との判別ができず、肉眼では検出し得なかった。仮に塗布されていたとしてもごく少量であったと思われる。

第3主体（第36図）

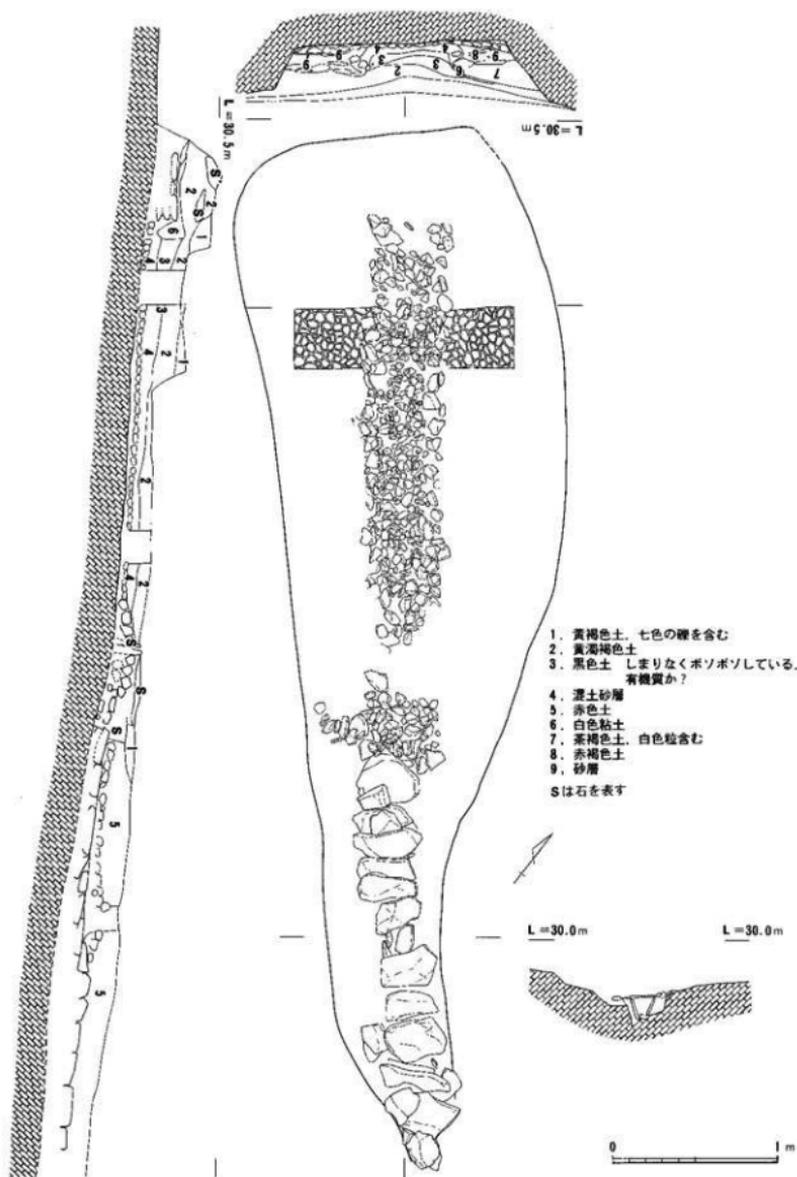
3基の主体のうち、最も1号墳よりに作られた主体で、2m程離れた位置には、1号墳の北東隅の外表施設が迫っている。本来1号墳の外表施設はよりこの主体部に近い位置まで迫っていたと想定されるが、主体部が大きく削られていることもないことからこの主体は1号墳に先行するものでないことがわかる。墓域は一方が開口し、排水溝となっている。排水溝の内部には第1・2主体のような配石構造は見られず、溝の掘り方のみを検出した。墓域は一側のみ二



第33図 4号墳第2主体棺側施設見通し図



第34図 4号墳第2主体棺側および排水施設検出状況 (S=1/30)

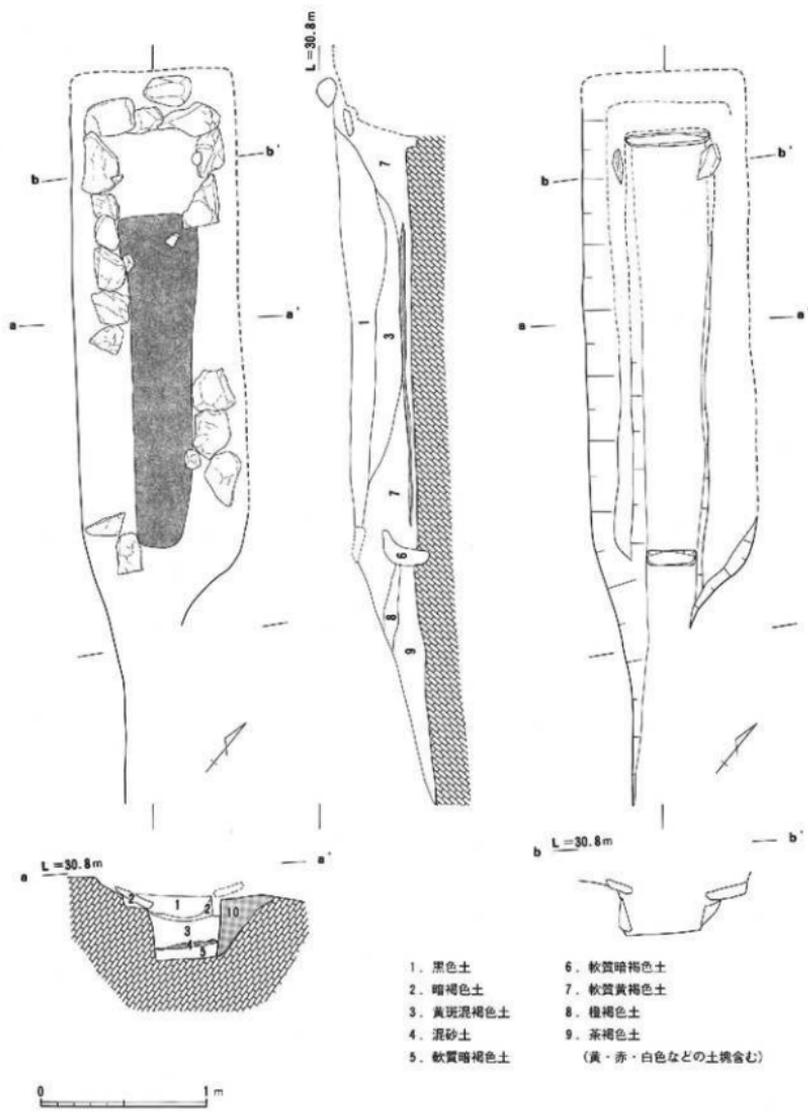


第35図 4号墳第2主体墓墳底円礫および排水施設蓋石検出状況 (S=1/30)

段掘りの長方形で、下段は棺を安置するのみのスペースを持つ。このため他の主体部で見られた棺側構造は認められなかった。墓壇底は平らに整えたのみで、円礫等の付設はされていない。棺形態は板材を用いた箱形木棺で、両小口部には小口板を仕組んだ深さ10cmの小さな溝が墓壇掘り込まれており、これから長側板を小口板で挟んだ形態であることが分かる。棺内底には棺の腐朽した軟かい暗褐色土が最下層に堆積し、この直上には薄く砂が認められた。遺体の頭位付近には扁平石が両側に各1枚ずつ立て掛けてあり、棺を保持したものと思われる。二段墓壇の上段から棺底まで、約50cmを計り、棺の高さを反映しているものと考えられる。棺蓋上には墓壇の上段に1/2が、棺上にもう半分が掛かるように扁平石がぐるりと配されてる。この上面には薄く白砂が施されている。このような棺の上面の配石構造は鳥取県倉吉市ニタ子塚遺跡⁽⁶⁾で見られるのみである。遺物は出土していない。

註

1. 出雲地方における古式土師器の研究の成果から、「小谷式」は概ね布留式古段階～中段階と考えられる。
2. 佐賀県教育委員会「西原遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財 発掘調査報告書』3 1983
3. 松本岩雄編『寺床遺跡発掘調査概報』1983 鳥根県東出雲町教育委員会
4. 山本清「山陰の須恵器」『鳥根大学開学十周年記念論集』1960
5. 鹿島町教育委員会『奥才古墳群』1985
6. 倉吉市教育委員会『ニタ子塚遺跡発掘調査報告書』1995



第36図 4号墳第3主体棺上配石検出状況(左)・完掘状況(右)(S=1/30)

表3 塩津山古墳群出土遺物観察表

採出 番号	図 版	器 種	法 量 (mm)	調 整	色調・胎土・焼成
3-1	17	土師器壺	口径8.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	・淡褐色 ・1-3mmの砂粒を多く含む
3-2	17	磁器徳利	底径7.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	・外-上薬、内-淡黄白色 ・緻密 ・良好
3-3	17	陶器水壺	口径29.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	・淡緑色 ・密 ・良好
3-4	17	土師器把手			・白黄褐色 ・やや粗、1mmの砂粒を含む ・良好
10		土師器壺	口径21.0	外:ハケメ、ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	・淡黄褐色 ・密、0.5-1mmの砂粒を含む ・良好
15-1	16	土師器器台	口径20.4	外:ヨコナデ、刺突文 内:ヨコナデ	・淡黄褐色 ・やや粗、2mmの砂粒を含む ・良好
15-2	16	土師器壺 頸部		外:ヨコナデ、羽状文、沈線文 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	・外-褐色、内-茶褐色 ・やや粗、2mmの砂粒を含む ・良好
15-3	16	土師器壺		外:ヨコナデ、綾杉文、沈線文 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	・外-赤褐色、内-淡黄褐色 ・やや粗、2mmの砂粒を含む ・良好
15-4	16	土師器壺	最大径30.2	外:ヨコナデ、綾杉文、沈線文 内:ヘラケズリ	・橙褐色 ・粗、4mmの砂粒系を含む ・良好
15-5	16	土師器 壺口縁部?		外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	・淡黄褐色 ・やや粗、砂粒を多く含む ・良好
15-6	16	土師器壺		外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	・橙褐色 ・やや粗、1mmの砂粒を含む ・良好
15-7	16	土師器壺	口径23.2	外:ヨコナデ、刺突文 内:ヨコナデ	・橙褐色 ・やや粗、2mmの砂粒を含む ・良好
15-8	16	土師器壺		外:ヨコナデ、カキメ、 内:ヘラケズリ	・淡黄褐色 ・やや粗、3mmの砂粒を含む ・良好
15-9	16	土師器壺 小型		外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	・黄褐色 ・やや粗、若干の砂粒を含む ・良好
15-10	18	土師器高环 坏部	口径24.0	風化のため調整不明	・淡橙褐色 ・やや粗、3mmの砂粒を含む ・良好
15-11	18	土師器 鼓形器台	口径10.4	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	・明橙褐色 ・やや粗、3mmの砂粒を含む ・良好
15-12	18	土師器 鼓形器台	底径17.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	・淡黄褐色 ・密 ・良好
15-13	18	土師器 鼓形器台	口径17.9 口径10.3	風化のため調整不明	・橙褐色 ・やや粗、1mmの砂粒を含む ・良好
15-14	18	土師器 鼓形器台	口径7.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	・外-赤褐色、内-淡黄褐色 ・やや粗、3mmの砂粒を含む ・良好
15-15	18	土師器 鼓形器台	底径16.0	外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ	・橙褐色 ・やや粗 ・良好

評定 番号	図 版	器 種	法 量 (cm)	調 整	色調・胎土・焼成
16-1	18	土師器高坏 坏部		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ハケメ	・明褐色 ・やや粗 ・良好
16-2	19	土師器高坏 脚部		外：細かいハケメ 内：シボリメ	・明褐色 ・やや粗 ・良好
16-3	19	土師器高坏 脚部		外：タテ方向ヘラミガキ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	・明褐色 ・やや粗 ・良好
16-4	18	土師器 低脚坏		風化のため調整不明	・明褐色 ・やや粗 ・良好
16-5	19	土師器 低脚坏		風化のため調整不明	・明褐色 ・やや粗、1mmの砂粒を含む ・良好
17-1	18	土師器 鼓形器台	口径17.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	・赤褐色 ・やや粗、2mm程砂粒多く含む ・良好
17-2	19	土師器 鼓形器台		外：ヨコナデ 内：調整不明	・赤褐色 ・やや粗 ・良好
17-3	19	鋼鐵	鎌身長4.2 最大幅1.2 厚さ 0.4	柳葉型	・青緑色 ・残り悪い
21-1	20	土師器甕		外：ハケメ 内：ヘラケズリ	・淡器褐色 ・やや粗、3mmの砂粒含む ・良好
21-2	20	土師器甕	口径19.4	外：ヨコナデ 内：ヘラケズリ、指頭圧痕	・褐色 ・やや粗、1mmの砂粒を含む ・良好
21-3	19	刀子	刀身長9.5 元幅1.3 茎長 2.0 先幅1.1	外：木質が残る	・赤茶褐色
23-1	20	土師器甕	口径33.8 器高63.0	外：ハケメ 内：ヘラケズリ	・褐色 ・3mm以上の砂粒を多く含む ・良好
23-2	20	土師器高坏	口径16.2	外：ヨコナデ 内：ヨコ方向ミガキ	・黄褐色 ・やや粗 ・良好
24		門筒器台	口径33.4	外：口縁管文様 内：ヘラケズリ	・黄褐色 ・やや粗 ・良好
28-1	21	円筒埴輪	基底部口径13.8	外：ナデ、ハケメ 内：指頭圧痕	・淡黄褐色 ・密 ・良好
28-2	21	円筒埴輪		外：ナデ、ナナメナデ 内：ナデ、ナナメナデ、指頭圧痕	・淡黄褐色 ・やや粗、4mm砂粒を多く含む ・良好
28-3	21	円筒埴輪		外：ナデ 内：ナナメナデ、指頭圧痕	・淡黄色 ・やや粗、3mmの砂粒を含む ・良（軟質）
28-4	21	円筒埴輪	上端部口径18.0 基底部口径13.1	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、指頭圧痕	・淡黄褐色 ・やや粗、4mm砂粒を多く含む ・良好
28-5	21	円筒埴輪	基底部口径14.3	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、指頭圧痕	・淡黄褐色 ・やや粗、5mm砂粒を多く含む ・良好
28-6	21	円筒埴輪	上端部口径17.2 基底部口径14.0	外：ナナメナデ、ハケメ 内：ナデ、指頭圧痕	・淡黄褐色 ・やや粗、4mm砂粒を多く含む ・良好

挿入 番号	図 版	器 種	法 量 (cm)	調 整	色調・胎土・焼成
28-7	22	円筒埴輪 口縁		外：回転ナデ、ナナメナデ 内：回転ナデ、ナデ	・黄褐色 ・やや粗、2mm以下の砂粒含む ・良好
28-8	22	円筒埴輪 口縁		外：回転ナデ、ナナメナデ 内：回転ナデ、ナデ	・赤褐色 ・やや粗、3mm以下の砂粒含む ・良好
28-9	22	円筒埴輪か		外：井ゲタ状沈線 内：ナデ	・明褐色 ・やや粗、希に1cmの砂粒含 ・良好
28-10	22	須恵器壺	口径17.7	外：波状文 内：ナデ	・暗灰色 ・密 ・良好
28-11	22	須恵器壺		外：回転ナデ、波状文 内：回転ナデ、シボリメ	・淡青灰色 ・密、少量の砂粒を含む ・良好
29-1 29-4	22	円筒埴輪	口径19.4	外：ヨコナデ、タテハケメ、ケズリ 内：ナナメハケメ、ヨコナデ	・淡黄褐色 ・密 ・良好
29-2	22	円筒埴輪	口径14.4	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ	・淡黄褐色 ・やや粗、少量の砂粒を含む ・良好
29-3	22	円筒埴輪		外：ナデ、ハケメ 内：ハケメ	・赤褐色 ・密、少量の砂粒を含む ・良好
29-5	22	円筒埴輪		外：ヘラケズリ 内：指頭圧痕	・淡黄褐色 ・密、少量の砂粒を含む ・良好
29-6	22	円筒埴輪	口径14.8	外：ナデ、タテハケメ 内：ナナメハケメ、ケズリ	・淡黄褐色 ・やや粗、2mm以下の砂粒含む ・やや不良
29-7	22	須恵器壺		外：回転ナデ、波状文 内：回転ナデ	・灰褐色 ・密 ・良好
29-8	22	須恵器壺 or 甕		外：タタキメ 内：タタキメ	・黒灰褐色 ・密 ・良好
29-9	22	須恵器壺 or 甕		外：タタキメ 内：タタキメ	・淡黄灰褐色-黒褐色 ・密 ・良好
29-10	22	須恵器壺 or 甕		外：タタキメ 内：タタキメ	・黒褐色 ・密 ・良好
29-11	22	須恵器壺 or 甕		外：タタキメ 内：タタキメ	・黒褐色 ・密 ・良好
29-12	22	須恵器壺		外：タタキメ	・灰色-淡黄褐色 ・やや粗 ・良好
32-1	22	土師器壺 底部	最大径46.0	外：調整不明 内：ケズリ、指頭圧痕	・暗褐色 ・やや粗、1mm程の砂粒を含む ・良好
32-2	22	刀子		外：木質は、1mm残る	・ ・ ・

第4章 ま と め

以上調査について記してきたが、今回得られた成果を中心に整理し、若干の所見を述べまとめたい。それに先立ち1号・4号墳の成果についてあげておく。

- ・墳丘は、丘陵を切削加工して成形され墳頂平坦面に若干盛土がされるもので、当地域の弥生墓の一般的な成形方法と同じである。
- ・墳形は、北辺が弓なりに反るいびつな長方形を呈すが、これは隅を舌状に突出させる四隅突出型を指向したものではなく、長方形を指向し、より視覚的效果を高めるために採られた方策であると思われる。
- ・外表を飾る配石構造は、四隅突出型墳墓の外表施設の退化した形態であり、一連の四隅突出型の配石構造の変化の中で捉えられる。
- ・各主体部の内部構造は、竪穴式土槨の採用という点では出雲地域の弥生墓の伝統からの飛躍が見られ、外部からの影響が伺えるが、埋葬の一部で砂を用いるという点では弥生墓以来の在地の埋葬儀礼を残しているといえる。
- ・供献土器は、墓壇上面認められたが、壺・高坏・低脚坏・鼓形器台といった在地の土器のみである。
- ・棺は木棺と土器棺があり、木棺には組合せ式・刳貫き式がある。
- ・棺を保護する棺外施設は、川原円礫・白砂・扁平礫を用いたもので、多様である。

(1) 1号墳の外表施設・墳形

まず「四隅突出型」の外表の配石構造について簡単に整理しておきたい。弥生時代中期末以降中国地方山間部から日本海沿岸部の広い範囲において展開する墳墓形態で、分布や平面形態・外表施設には時期差・地域差があり、これに関する論考も多い。出雲地方の海岸部では、弥生時代後期後半になって採用され、墳裾列石の複雑化・突出部平面形態の巨大化といった「特殊化」した形態のものが出現する。荒島墳墓群では「特殊化」以降の四隅突出型が8基確認され、配石構造が整美され、突出部が巨大化していく様子が認められる。これを見ると最も新しい時期の四隅突出型である宮山4号墓では、突出部が墳裾の方形の枠から大きく飛び出して巨大化し、しゃもじ状に肥大化している。墳裾列石は敷石・立石列が二重に廻る。同時期の安養寺1号墓は、突出部の形態は不明だが、墳裾列石は同様に整美なものである。

これに対して塩津山1号墳の外表施設では、貼石は石の選択や石の貼り方が四隅突出型と共通している。しかし四隅突出型で特徴的な墳裾の列石構造は、立石が北側斜面で、敷石が北側斜面・東側斜面でそれぞれわずかに認められるのみで、裾をぐるりと廻る四隅の構造とは大きく異なり、痕跡的に形状を止めているにすぎない。平面形態でも、北辺は弓状に貼り出すが、

これは視覚的効果を高めるために採られた方策とも考えられ、隅がしゃもじ状に肥大化した四隅突出型を指向したものではないと思われる。また南東隅の後線上の列石は墳丘端に沿って犬走り状にめぐるテラス面の範囲から突出するものではなく、この点でも隅を舌状に突出させる四隅突出型とは区別される。

以上より塩津山1号墳の外形は、四隅突出型の形態を配石構造において痕跡的に止めるものの、平面形態では四隅突出型を採用せず、方墳を指向したものと考えられる。

(2) 1・4号墳の埋葬施設について

塩津山1号墳・4号墳では、合計9基の主体部を検出した。これらの内部施設については、未調査で不明の1号墳第2・4主体を除いた7基は、すべて異なる構造である。2基の土器棺葬を除く5基の内部施設は、木棺型式・棺を保護する構造ともそれぞれに異なっている。特に棺を保護する構造は5基ともすべて異なり、類例も山陰で数例見られるのみで地方色の強い埋葬施設と考えられる。

棺を保護する棺側構造は、棺を固定するだけの機能に止まらず、埋葬に関する儀式と深い関連を持って造られた施設であり、埋葬において意味を持っていたことは想像できる。木棺・石棺直葬や、棺床面のみを整える磔床よりはるかに複雑で、これらとは区別する必要がある。また初段階が棺を安置する床を整え、最終段階は砂をもって覆い隠すというもので、総体として「棺」を収納する施設である意味から「柩」構築の簡略化された形態と考えることもできよう。

棺を保護する棺側施設は、荒島墳墓群では表4にまとめたように、この地域で墳墓が造られ始めた弥生時代後期後半に起源を求めることができる。仲仙寺9・10号墓・宮山4号墓・安養寺1号墓では「白砂」を棺床に敷くとともに棺上に用い棺を覆い隠している。これらには河原円磔や扁平石が用いられておらずこの点では塩津山1号・4号墳の例とは異なる。しかし白砂の量に差があるが、弥生墓・塩津山1・4号墳とも埋葬の最初と最後の場面で用いられている。また前期古墳の造山1・3号墳の堅穴式石槨でも白砂の存在が確認されていることより、弥生時代後期後半以来の埋葬儀式の一部が前期古墳にも取り入れられている可能性が高い。

堅穴系の埋葬施設で棺以外の内部施設では、弥生時代後期後半の木槨から弥生時代末に小型石槨が出現し、古墳時代前期の長大な石槨への変遷が考えられている。直接長大な堅穴式石槨の成立に関わるかどうかは問題があるが、長大な堅穴式石槨が出現する前後の時期に、「地方色の強い」「特異な」棺を保護する構造を持つ古墳がいくつか報告されている⁽¹⁾。いまのところこれらが直接長大な堅穴式石槨の成立に先立つものなのか長大な堅穴式石室成立後この簡略化された形態であるかといった問題は今後より詳しく検討をするべき課題であるが、古墳が成立・定形化していく課程において存在することは興味深い。

塩津山では、木棺も板材を組み合わせる組合せ式と刳貫き式の両者があり、それぞれに形態

が異なっている。これまで県内の弥生墓で発見された木棺は、板材を組み合わせる箱形木棺であり、底が弧を描く朝貫き式木棺は竪穴式石槨の導入とともに古墳時代前期になって出現すると考えられ、弥生時代に遡る例は確認されていない。塩津山1・4号墳は、墓壇の主軸が整然と揃っていることや、出土土器形式においても長期に渡るものではなく、短期間に次々と連続して埋葬が行われたと考えられ、木棺も同時期に複数の型式が存在したと思われる。これらの型式差は、1号墳第1主体を除き、棺の規模や副葬品にほとんど差が無いことより、階層差と言うより、被葬者の性別や出身といった個人差を表しているのではないだろうか。⁽²⁾

(3) 円筒器台形土器について

1号墳第6主体に用いられた円筒器台形土器は、上半に最大径を持つびつな円筒に直立する複合口縁部とハの字状に開く複合化した脚台部が付くというもので高さは83cmある。最終的には棺として使用されているが、制作目的が棺専用の焼き物であったかということについては疑問が残る。形態から壺をのせる「器台」としての目的を持って制作されたことが予想されるが、墳丘上や周辺で器台として使用された痕跡を調査によって明らかにすることはできなかった。

類似する土器は幾つか報告されている。荒島墳墓群では、全体が分かるのは塩津山1号墳1例のみであるが、器形や文様に共通点の多い円筒形の土器が造山1号墳で2個体以上、大成古墳で可能性のある小片の類例が見られる。造山1号墳では脚端部を欠いており、全形は不明である。逆ハの字状に開く複合口縁部はヨコナデ調整で、部分的に刺突文や円形スタンプ文様が施される。頸部以下は内面ヘラケズリ外面ハケメ調整で、頸部外面には板状工具による綾杉文が廻る。大成古墳では墳頂の攪乱土壌中の二次堆積土中出土で、使用された状態は不明で、小片で壺の可能性も残る。文様は円形スタンプ文や綾杉文である。以上は古墳時代前期に造られた方墳で、この時期の荒島墳墓群では円筒形の土器が埋葬に伴い何らかの形で用いられた可能性が高い。この他には、景初三年銘の鏡が出土した島根県加茂町神原神社古墳では、竪穴式石槨の上面から多数個体分の円筒形の土器片が壺形土器等とともに出土している。これは墓壇上で壺とセットで用いられた可能性が高く「器台」として機能した可能性を伺わせる。形態は脚端がスカート状に開き台状は呈さないようである。松江市間内越1号墓は弥生時代終末期の隅が舌状に突出する四隅突出型墳丘墓で、この墳頂中央部・墳丘周辺出土の土器に円筒形の土器が想定されるものが含まれているが全体の形態は不明で、方形透しと円形スタンプ文が認められる。鳥取県大山町徳楽方墳では、詳しい出土状態は不明だが、墳丘より円筒形の土器片が多数出土している。これらには、綾杉文やスタンプ文といった文様が施されたガ状の突帯が貼り付けられている。

出雲では円筒形の土器は、弥生時代後期後半に点的に吉備地方から搬入された特殊器台形土器が認められるだけで、在地の土器組成に定着することはなかった。この後上述の弥生時代末

～古墳時代前期の墳墓の一部で登場する。登場した土器は文様や技法が在在地色の強いものではあるが、外形は外部からの情報を得て成立したものと考えられ、文様や透かしなどは在地の技術を駆使して造られた祭祀用の土器と思われる。

(4) 赤色顔料の使用について

今回の調査では1号墳第3主体棺遺体頭位付近と同第6主体円筒器台形土器外面の2箇所で見つかり、肉眼で判別し得る赤色顔料を検出した。しかし、地山が独特の赤色を呈することもあり、検出が困難で他の主体部においても本来は用いられていた可能性も否定できない。分析の結果第3主体からは微量の水銀朱が検出され、第6主体では水銀朱は確認されていない。この差は塗布される対象の違いによるものとも考えられるが、分析報告に述べられているように即断することは危険である。ただ、弥生墓で見られるような水銀朱の多量使用とは画するべきと考えられる。このような微量の水銀朱や赤色粘土等に起因すると考えられる赤色物質を顔料として埋葬に用いる例は、鳥根県の中・小規模古墳ではいくつか類例が報告されており、塩津山例もこれらとの共通点が見い出せよう。赤色顔料については、その精製方法の困難さや、産地が限定されることから水銀朱が最も貴重品との認識があり、入手の背景には権威が考えられている。微量の水銀朱を用いる墳墓、水銀朱は用いず他の赤色物質で赤色を表現する、これらの差は階層差によるものか、時期差か、地域差か、といった問題は今後の課題として追求されるべきであろう。

(5) 供献土器について

1・4号墳頂で出土した土器に時期差はなく小谷式であることは述べた。荒島墳墓群では弥生墓・前期古墳とも墓壇上面で土器が出土しており、弥生から古墳へ供献土器祭祀の継続が見られる。これらを外観して、四隅突出墓と前期方墳では用いられる土器に差があるようで、前期古墳では頸部を綾杉文で飾る壺が出土する。これは荒島墳墓群のみで見られる特徴ではなく、他の前期古墳でも見られる。このような土器は四隅突出型墳墓上の祭祀では用いられていない器種であり、「古墳」の導入とともに新たに墳墓祭祀の土器セットに加わったものと考えられる。以上供献土器の上からも弥生墓との差が見られる。

(6) 荒島墳墓群における塩津山古墳群の位置付け

以上塩津山1・4号墳について、荒島墳墓群の弥生墓・前期古墳との比較を行いながら検討を試みた。これによると、塩津山1・4号墳は、四隅突出型の弥生墓の痕跡を少なからず残しながら、新しい要素が取り入れられて造られていると言えよう。新しい要素とは、当地域の伝統の中から発展的に生じたものとは考え難く、外部からもたらされたものと言えよう。荒島墳墓群において弥生時代と古墳時代の画期を求めるとすれば、独自性の強い弥生墓に、外来の情報を受け入れたこの時期を画期と捉えることができよう。

塩津山1号墳と、荒島墳墓群の他の前期古墳との細かな前後関係を明らかにすることは難し

い。しかし、四隅突出型の墓を造った首長の後継者達が古墳時代前期前半に次々と方墳を造ったことは想像できる。そしてこれまで言われてきたようにこれらのうち30mを越える大型方墳が中海に直接面した丘陵上に立地し、これより規模の小さい古墳が丘陵を異にして立地していることはそれぞれの前期古墳の被葬者像を理解する上で重要な手掛かりであろう。また、これらの前期古墳がいずれも方墳であるという点は、前方後円墳体制成立期の荒島勢力の体制内における位置付けを考える上で重要な事柄であると思われる。

荒島墳墓群では、弥生時代後期後半に首長を葬るために四隅突出型墳丘墓を造り始め、この伝統を受け継ぐ墓造りは古墳時代前期前半まで連続する。しかしこの直後の古墳時代前期後半から中期にかけての古墳は今のところ発見されておらず、一時的に空白の時期がある。この後、円筒埴輪・須恵器を有する大型方墳である清水山1号墳、前方後方墳の宮山1号・3号墳が造られ、大型古墳が復活する。列島における古墳時代の画期とは別に、荒島の首長達の画期を考えると、古墳時代前期前半まで続けてきた墳墓造りを停止させられるこの時こそ重要な局面を迎えていたのかもしれない。

今回の調査で、荒島墳墓群における前方後円墳体制の受容の一端を明らかにできたことは意義深いことであろう。また、前方後円墳体制下の地方勢力の動態の一例としての荒島墳墓群を再評価する必要を感じ、今後の課題としたい。

註

- (1) 蓮華谷(Ⅱ)2号墳(徳島県)、石塚山1号墳(香川県)などが知られる。徳島県教育委員会編『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』4 1994
- (2) 岸本道昭編『龍野市文化財調査報告16 新宮東山古墳群』龍野市教育委員会 1996
倉吉市教育委員会『二タ子塚遺跡発掘調査報告書』1995
- (3) 本田光子・成瀬正和「丸子山古墳出土の赤色顔料について」
『武者山遺跡・丸子山古墳群』仁多町教育委員会 1995

第5章 自然化学的分析

塩津山1号墳の赤色顔料

東京国立文化財研究所 朽津 信明

1. はじめに

島根県安来市の塩津山1号墳では、赤色顔料の使用が認められたという。筆者は、従来から島根県下の古代遺跡で見られる赤色顔料の分析を行ってきた（例えば朽津、1995）が、今回もその一環として試料分析を行ったので、その結果をここに報告する。

2. 試料

試料は、基本的に島根県埋蔵文化財調査センターの勝瀬利栄氏から提供していただいたものを用いた。塩津山1号墳で赤色顔料の存在が認められたのは、第6主体棺使用の円筒器台形土器の表面部と第3主体の棺床部分とであると言うが、このうち、円筒器台形土器では、土器片の表面で最も強く赤みが感じられる部分を、そして第3主体では、棺床の砂のうちの最も赤みを帯びた部分をそれぞれ極微量採取して、試料として用いた。試料採取地点は、図1に示す。

3. 分析方法と結果

3.1. 方法

試料は、実体顕微鏡による観察を行った後、元素分析と鉱物分析を行った。元素分析は、(株)堀場製作所のX線分析顕微鏡XGT-2000を用い、50kV、1mAの条件で行った。鉱物分析は、円筒器台形土器片付着のものについては試料が微量なため微小部X線回折分析で、第3主体のものはX線粉末回折でそれぞれ行った。X線回折装置は、マックスサイエンス社のM18XHF-SRAを用い、いずれの場合にも200kV、40mAの条件でCr α 線を用い、微小部においては、100 μ mのコリメーターで行った。

3.2. 結果

結果は表1に示す。円筒器台形土器片からは鉱物として石英(SiO $_2$)と、若干の赤鉄鉱(Fe $_2$ O $_3$)が検出され、元素分析でもこれと整合的な結果が得られた。第3主体の試料からは鉱物として石英、粘土鉱物とともに若干の辰砂(HgS)が検出され、元素分析でもこれと整合的な結果が得られた。

4. 考 察

円筒器台形土器片については、赤鉄鉱が検出されたことから、朽津(1995)のベンガラの定義である「鉄の酸化物を発色の主要因とする赤色顔料」と言う条件を満たしており、一応はベンガラと呼んで差し支えないものと言える。ただし、確認された赤鉄鉱のピークは明瞭なものとは言い難く、また石英などの不純物が豊富に確認されることから、例えば神原神社古墳で観察されたような(朽津、印刷中)純粋なベンガラに比べて、あまり純度のよくないベンガラであると考えられ、これらを同じ言葉で表現するのには問題があるかも知れない。なお、このような不純なベンガラは、粘土などを焼いたものではないかの議論がなされることがある(例えば山崎、1951)が、今回の分析では高温を経験したことを確実に示すような鉱物は検出できなかったため、これについては何とも言えない。また、従ってこの赤色顔料が塗られたのが、この円筒器台形土器が焼かれる前なのか後なのかについても、今回の分析結果からは何とも議論できない。

一方の第3主体の試料については、辰砂が検出されたことから朽津(1995)の朱の定義である「水銀の硫化物を発色の主要因とする赤色顔料」と言う条件を満たしており、朱と呼ぶことが可能である。しかし、ここで観察される物質中で朱が占める割合は極めて低いと見られ、石英や粘土鉱物が大半を占めていると考えられる。このうちの石英については、主体部に施された砂に起因するとみられ、粘土鉱物は砂のマトリックスや赤色粘土に起因すると思われる。ただし赤色粘土と言っても、塩津山I号墳自体が赤色粘土でできた山の上に築かれていることから、第3主体で検出された粘土鉱物が意図的に施されたものであるかどうかははなはだ疑問であり、議論は困難である。いずれにしろ第3主体における朱の存在は当初から微量であったと推定され、同じ朱が検出されたと言っても、豊富に朱が塗られていた例えば西谷3号墓などの例(例えば松江市教育委員会、1994)からは区別されて記載され、議論されるべきであろう。

なお、今回の分析で得られた結果の持つ意味については、近接した時代、あるいは近接した地域の他の古墳の例等を比較・検討しながら、慎重に議論されるべきである。それについては、本報告の範囲を若干逸脱するため、それらの結果を待つかたちで別の機会にゆずることとし、ここでは分析結果の記載までにとどめ、これ以上の議論は避けることとする。

謝辞 現地調査にご協力いただき、試料をご提供いただいた鳥根泉埋蔵文化財調査センターの勝瀬利栄氏に感謝します。

おわりに ー 赤色顔料の分析に関して ー

本報告の性格からは異例ではあるが、今回の分析の経緯を紹介し、赤色顔料の分析について思うところを述べて結びとしたい。

今回の分析のうち、第3主体における赤色顔料の分析においては、当初は、試料保存の意識から、提供を受けた試料のうちのごく一部分のみを用い、結果として朱の存在は確認できなかった。今回の報告をまとめるに当たって、確認のために試料量を増やして再度分析を試みたところ、僅かに朱の存在を確認することができた次第である。従って、もしも当初の分析結果だけで議論を組み立てていたなら、「塩津山1号墳では朱は用いられていない」と言う結論を引き出していたかも知れない。それどころか、当初から赤色粘土に起因すると見られる鉄の存在は確認されていたため、もしも鉱物分析の情報がなく元素分析の結果だけで議論していたら、「塩津山1号墳の第3主体ではベンガラが使われていた」という推論をしていた可能性すら考えられる。これでは、その後の議論が180度違ってきてしまったであろう。

今回の例のように、極微量の朱が用いられている古墳は他にも多数あると考えられ、そのような場合には、朱が用いられていたことを証明することは可能だが、朱が用いられていなかったことを証明するのは極めて困難だと言うことを認識しておく必要がある。また、島根県下では、今回のように赤色粘土の地盤上に遺跡がある場合が多いが、その場合には、元素分析で鉄が検出されたとしても、決してすぐにはベンガラが意図的に施されたとは結論できない点も注意が必要であろう。分析に携わる者として、分析は心して慎重に行わなければならないことをあらためて実感されれるとともに、試料提供者の側にも、慎重な試料採取をお願いする次第である。

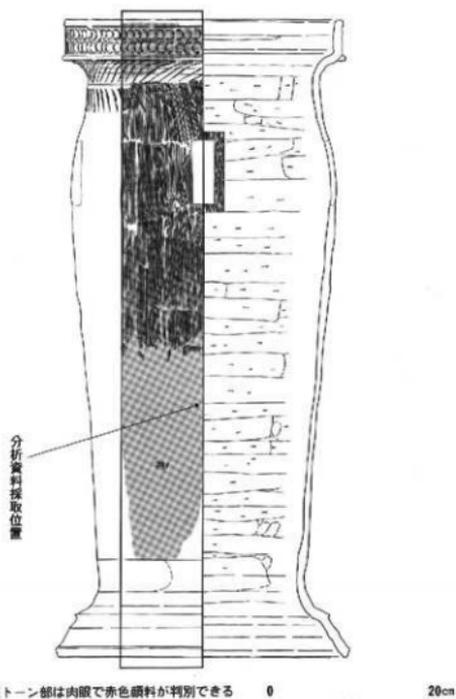
引用文献

- 朽津信明 (1995) 吉佐山根1号墳及び穴神1号横穴墓における赤色顔料、平ラII遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告10、143-150 島根県教育委員会
- 朽津信明 (未公表) 神原神社古墳の赤色顔料について、(未刊) 神原神社古墳発掘報告書 加茂町教育委員会
- 松江市教育委員会 (1994) 釜代1号墳外発掘調査報告書I、(財)松江市教育文化振興事業団文化財調査報告書第1集
- 山崎一雄 (1951) 装飾古墳の化学的研究、古文化財之科学、5、8-14

表5 分析結果一覧

試料	主要元素	主要鉱物
円筒器台形土器	Si, Fe, K	石英、赤鉄鉱
第3主体部内	Si, Al, Fe, Hg	石英、粘土鉱物、辰砂

石英 (SiO_2)、赤鉄鉱 (Fe_2O_3)、辰砂 (HgS)、粘土鉱物とあるのは、粘土鉱物であることまでは同定されたが、鉱物名の同定には至らなかった。



第37図 塩津山1号墳第6主体棺使用土器赤色顔料検出状況



圖 版



塩津山古墳群調査区遠景



塩津山古墳群調査区前景（柳遺跡から）



塩津山1号墳調査前近景



塩津山4号墳調査前近景



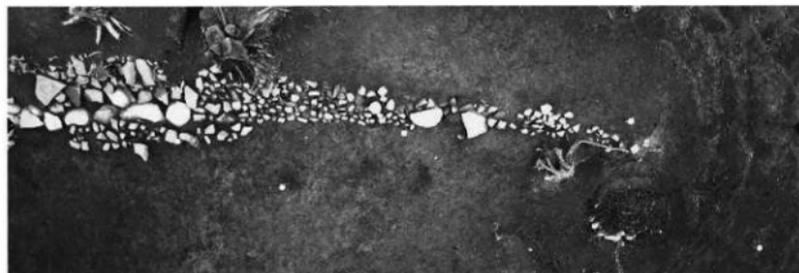
1号墳北側斜面外表施設転石除去前（北側から）



1号墳北側斜面外表施設転石除去前（上・東半、下・西半、上空より）



1号墳北側斜面外表施設転石除去後（北側から）



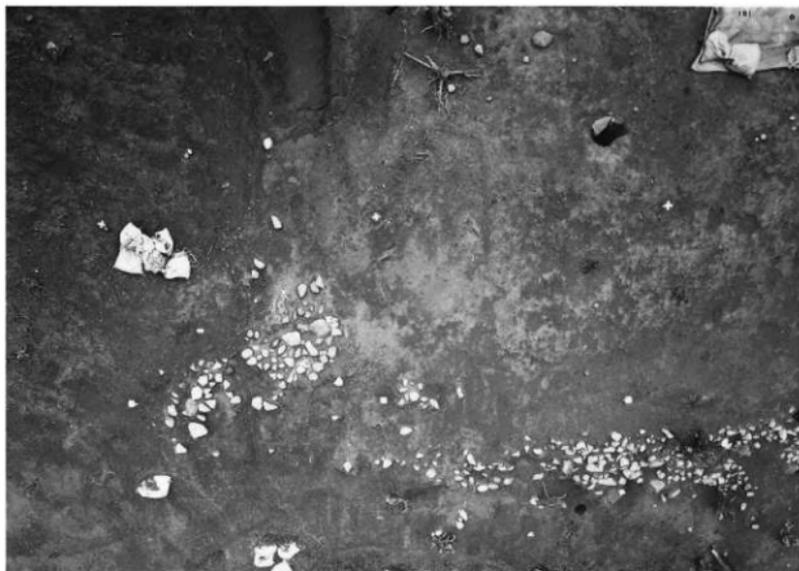
1号墳北側斜面外表施設転石除去後（上・東半、下・西半、上空から）



1号墳外表施設（北東隅部分、上空から）



1号墳外表施設（東側から）



1号墳外表施設（南東隅部分、上空から）



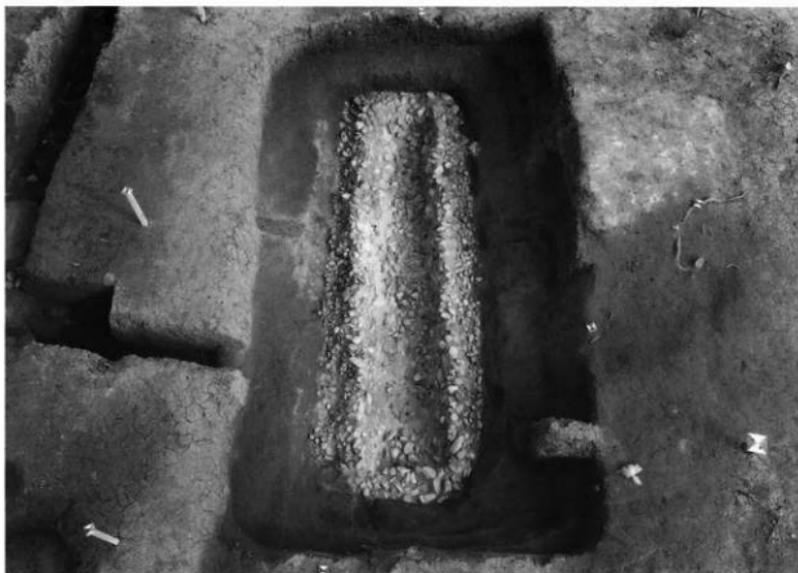
1号墳南東隅墳裾壺形土器出土状況



1号墳第1主体上面土器検出状況



1号墳第2主体上面跡検出状況



1号墳第3主体棺痕跡検出状況



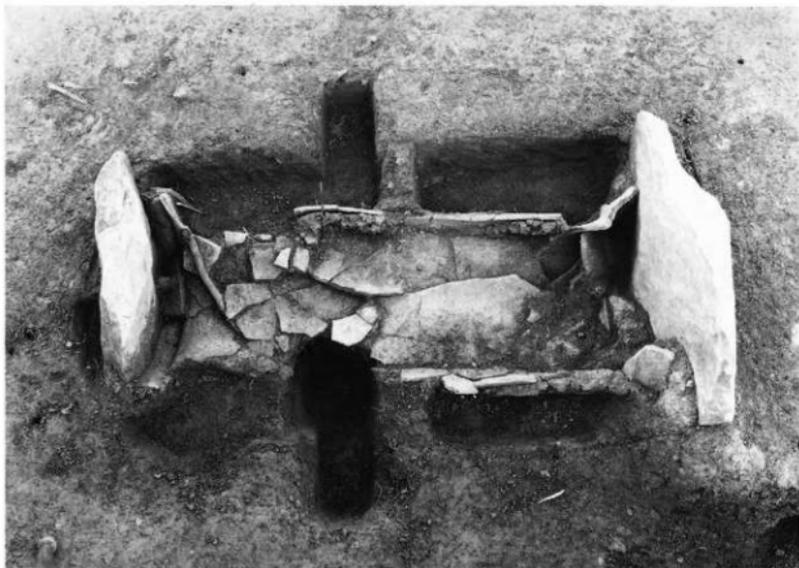
1号墳第3主体刀子検出状況



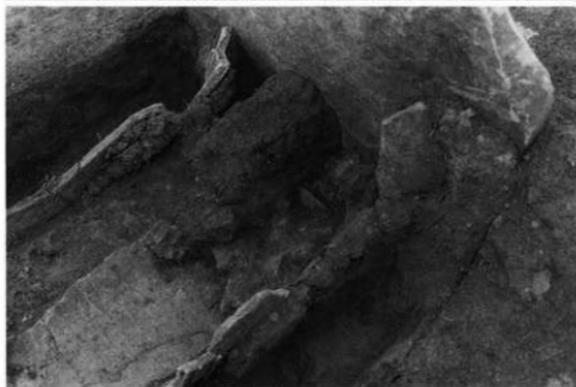
1号墳第5主体



1号墳第6主体検出状況



1号墳 第6主体



1号墳第6主体脚部白色粘土檢出状況



2号墳調査前近景（南側から）



2号墳調査後近景（南側から）



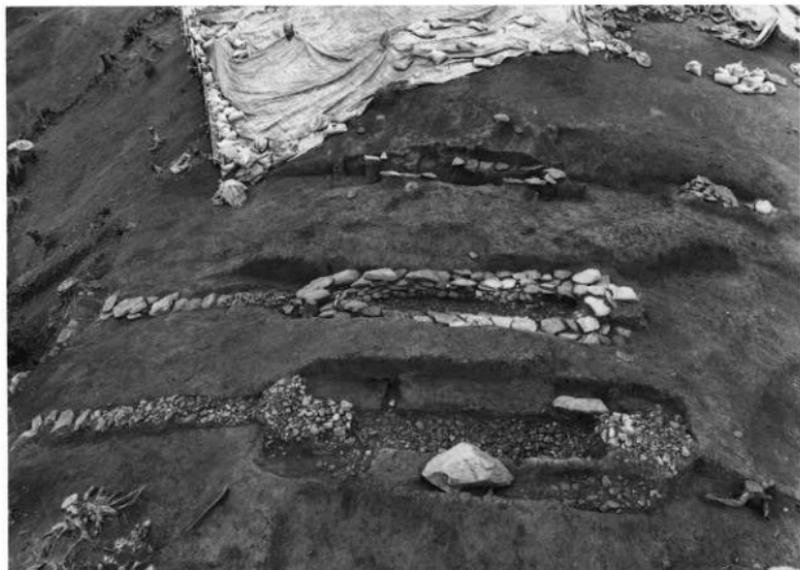
2号墳円筒埴輪検出①



2号墳円筒埴輪検出④



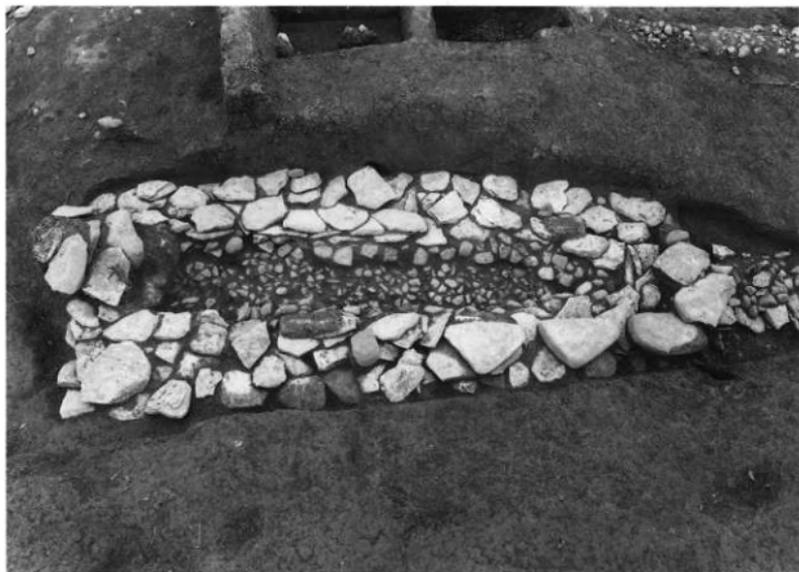
2号墳円筒埴輪検出①②③
④⑤⑥



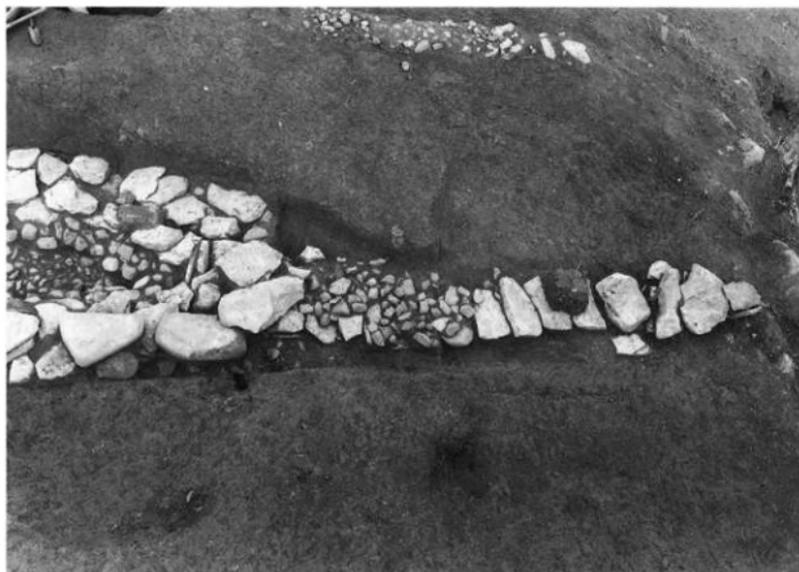
4号墳（手前から）第1・2・3主体検出



4号墳第1主体刀子検出状況



4号墳第2主体棺痕跡検出



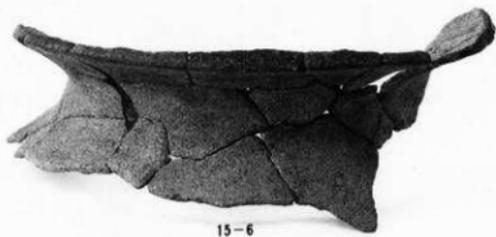
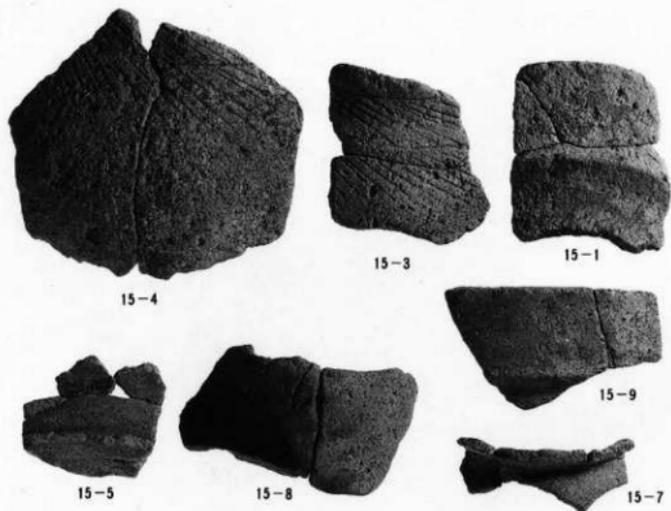
4号墳第2主体棺外排水施設置石検出



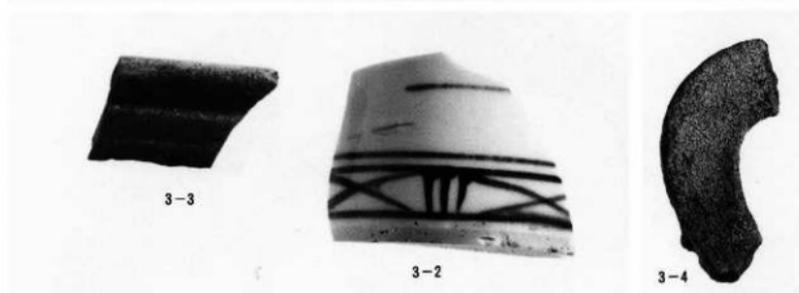
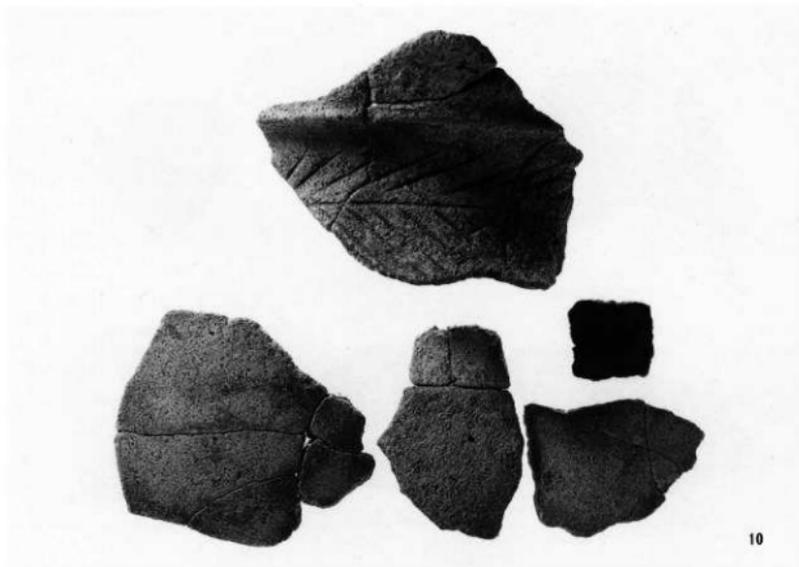
4号墳第2主体頭位方向



4号墳第2主体白色粘土検出



1号墳出土遺物(1)



1号墳出土遺物(2)



15-13



15-14



15-15



15-10



15-11



15-12



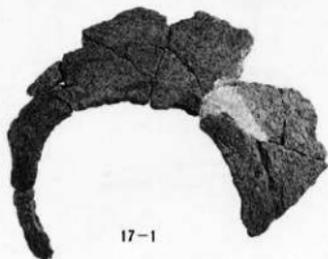
16-3



16-2



16-1



17-1



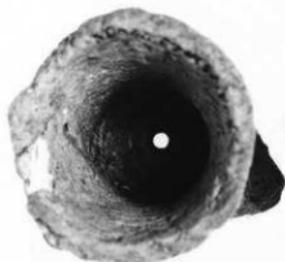
16-4



17-2



16-5



16-2



16-3



17-3



32-2



32-2



21-3



21-3

1号墳・4号墳出土遺物(1)



21-1



21-2



23-1



23-2

28-1



28-4



28-2



28-5

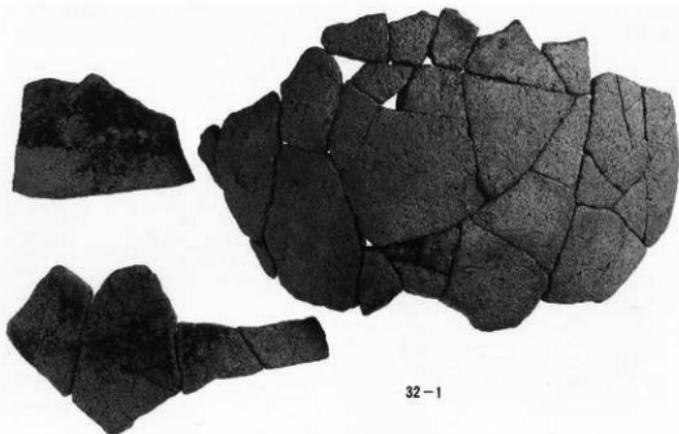
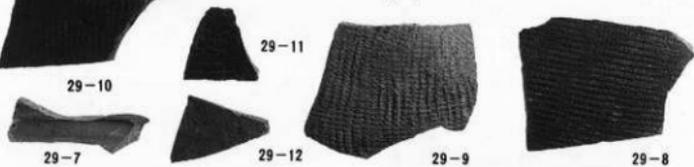


28-3



28-6





ふりがな	しおつやまこふんぐん							
書名	塩津山古墳群							
副書名	一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区							
巻次	Ⅴ							
シリーズ名	一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区							
シリーズ番号	Ⅴ							
編著者名	勝瀬利栄・朽津信明							
編集機関	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター							
所在地	690-01 島根県松江市打出町33番地 0852-36-8608							
発行機関	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター							
発行年月日	西暦1997年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
塩津山古墳群	島根県安来市久白町 字塩津・荒島町字沢	32206	A-69	35°25'23"	133°12'39"	19940401 ～ 19960331	3200	道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
塩津山古墳群	古墳群	古墳時代	古墳3基 主体部計9基 確認	土師器 鉄器(刀子)		弥生～奈良時代の墳 墓の密集地での前期 古墳の新発見。 古墳築造の地方波及 の一例。		

塩津山古墳群

一般国道9号（安来道路）建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅵ

1997年3月発行

発行 建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

印刷 柏木印刷有限会社